

古 賀 遺 跡

鳥栖市文化財調査報告書第94集

2020

鳥 栖 市 教 育 委 員 会

序 文

鳥栖市は、脊振山地の東端部にあります九千部山を最高所として、九州最大の河川である筑後川に面した緑と水豊かな内陸都市です。この地域は、古来より九州における交通の要衝として発展し、貴重な文化財が数多く存在する地域です。

本書は、共同住宅建設に先立つ道路敷設工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した鳥栖市宿町、古賀町にまたがる古賀遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡は佐賀川久保鳥栖線と久留米基山筑紫野線が交差する地点にあります。弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけて営まれた集落が存在したことが明らかとなり、古墳時代へと遷り行く社会の一端を垣間見ることができました。

本書を通じて、地域の文化財に対して一層のご理解をいただき、また、学術・文化の向上に寄与するものとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、開発と文化財保護との調整にご理解とご協力いただいた株式会社アルシスホームをはじめ、関係者の皆様、そして発掘作業、整理作業に従事された皆さまに厚く御礼を申し上げ序文といたします。

令和2年3月27日

鳥栖市教育委員会

教育長 天野 昌明

例 言

1. 本書は、宅地造成に伴う道路敷設箇所の埋蔵文化財発掘調査を実施した鳥栖市古賀町字稲塚 470 番 1、470 番 2、471 番 1、471 番 2、宿町字船底 515 番 1 に所在する古賀遺跡 3 区の調査報告書である。
2. 発掘調査は、令和元年 5 月 27 日から 7 月 5 日、整理報告は令和元年 6 月 24 日から令和 2 年 3 月 31 日まで鳥栖市教育委員会が実施した。
3. 現地調査から報告書作成までの作業に従事したものは下記のとおりである。なお、出土遺物の整理を含む報告書作成業務は鳥栖市牛原町文化財整理室で実施した。

表土除去：有限会社 豊

発掘作業：秋好忠義、江藤芳雄、緒方幸弘、刈間節次、篠原英雄、杉岡俊昭、高尾喜則、本田洋、山口正樹

遺構実測：藤岡怜史、龍孝明

遺構写真：藤岡、龍

空中写真：有限会社空中写真企画

遺物整理：檜崎孝子、松崎友子、毛利よし子

遺物実測：松崎、毛利、藤岡、龍

製 図：檜崎、松崎、毛利、藤岡

遺物写真：龍

4. 本書の執筆は龍が担当した。

凡 例

1. 本書で報告する調査地区は 3 区とし、A 地区・B 地区に分割して調査を実施した。
2. 遺跡の略号は 古賀遺跡 (SKG) である。
3. 古賀遺跡で用いた遺構番号は 3 桁の一連番号とし、3 区 300 番台とした。また、番号の頭には遺構の性格を示す分類略号を付して表示した。小穴については P01 から一連番号を付した。
4. 遺構の種別を表す分類略号は次のとおりである。
SH：住居跡、SK：土坑、SD：溝、P：ピット
5. 遺構図に用いた方位は座標北である。座標は国土座標第Ⅱ系を用いた。
6. 測定値の表示に用いた単位は遺構m、遺物cmを原則とした。
7. 表で示した計測値のうち、() は復元値・推定値、〈 〉 は残存値を示す。
8. 出土遺物のうち、本書に掲載したものは 190001 番から一連番号をつけ、管理している。
9. 出土遺物、遺構・遺物図面および写真は鳥栖市牛原町文化財整理室に保管している。

本文目次

第1章 調査の概要	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の組織	
3. 調査の経過	
第2章 地理的・歴史的環境	2
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
第3章 調査の内容	7
第4章 古賀遺跡3区の調査	7
1. 竪穴住居跡 (SH)	
2. 溝 (SD)	
3. 土坑 (SK)	
4. ピット (P)	
5. その他 (SH301・303)	
第5章 まとめ	22

報告書抄録

挿図目次

図1 遺跡分布図 (1/10,000)	3
図2 調査区配置図 (1/5,000)	3
図3 古賀遺跡3区遺構配置図 (1/300)	5・6
図4 SH301 (1/60)	8
図5 SH301 出土土器 (1/4)	9
図6 SH301 出土鉄器 (1/2)	9
図7 SH302 (1/60)	10
図8 SH302 出土土器 (1/4)	11
図9 SH303 (1/60)	12
図10 SH303 出土土器① (1/4)	13
図11 SH303 出土土器② (1/4)	14
図12 SH303 出土土器③ (1/4)	15
図13 SD304・SK305 (1/60)	16
図14 SH301・303 出土土器① (1/4)	18
図15 SH301・303 出土土器② (1/4)	19
図16 SH301・303 出土土器③ (1/4)	20
図17 SH301・303 出土土器④ (1/4)	21

表目次

表1 古賀遺跡3区 出土遺物観察表	23
-------------------	----

図版目次

- 図版 1 1 古賀遺跡 3 区全景 (東上空から)
2 古賀遺跡 3 区全景 (上空から)
- 図版 2 1 SH301・303 全景 (上空から)
2 SH301・303 遺物出土状況 (南から)
3 SH301・303 土層 (北東から)
4 SH301・303 土層 (南西から)
5 SH301・303 土層 (南から)
6 SH303 SK1 遺物出土状況
- 図版 3 1 SH302 全景 (上空から)
2 SH302 完掘状況 (北から)
3 SH302 土層 (西から)
4 SH302 土層 (東から)
5 SH302 土層 (南から)
6 SH302 土層 (北から)
- 図版 4 1～2 SH301 出土遺物
3～6 SH302 出土遺物
7～15 SH303 出土遺物
- 図版 5 1～13 SH303 出土遺物
14～15 SH301・303 出土土器
- 図版 6 1～15 SH301・303 出土遺物
- 図版 7 1～15 SH301・303 出土遺物
- 図版 8 1～13 SH301・303 出土遺物
14～15 SH301・303 出土鉄器

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成31年3月28日付で株式会社アルシスホームより、宅地造成に先立ち埋蔵文化財発掘調査依頼、発掘届が提出された。これを受けて調査依頼のあった鳥栖市宿町字船底515-1、古賀町字稲塚470-1・2、471-1・2の2地点において、平成31年4月9日に確認調査を行い、遺構を確認した。事業者と協議を行い、遺構が確認された2,400㎡のうち、恒久的な構造物である道路敷設部分500㎡について、本調査を実施することで合意した。残りの宅地部分1,900㎡については、遺構面に影響がない限りは現状保存することとし、将来建造物の構築など、遺構に影響を及ぼす現状変更が行われる場合は、事前に協議を行うこととして覚書を交わした。

本調査は、令和元年5月27日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同日から調査に着手した。現地での発掘調査は7月5日に完了した。なお、整理作業は6月24日から着手した。

2. 調査の組織

鳥栖市教育委員会が主体となって実施した。組織は以下のとおり。

【平成31・令和元年度】

調査主体 鳥栖市教育委員会

総括 教育長 天野昌明

教育部次長 白水隆弘

生涯学習課長 松隈義和

生涯学習課参事 竹下 徹

生涯学習課課長補佐 八尋茂子

調査 生涯学習課文化財係

文化財係長 久山高史

文化財係主査 湯浅満暢（事前審査・確認調査担当）

文化財係主任 龍 孝明（小郡市人事交流派遣職員）

文化財係主事 藤岡怜史

3. 調査の経過

古賀遺跡3は、令和元年5月27日より重機による表土剥ぎを開始。6月17日まで掘削作業を行い、同日空中写真を撮影した。25日まで遺構実測を行い、7月1日に埋戻し、5日に現地引き渡しを行った。

第2章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

鳥栖市は、佐賀県東端部に位置し、北は基山町、福岡県那珂川市、東は小郡市、南は久留米市と県境を接する。市域は南北約9 km、東西約8 kmに広がり、面積は71.72km²を計る。市の北部には、脊振連山最東端にそびえる九千部山（標高847.5m）を主峰とした山々が南東に向かって裾野を広げ、東に杓子ヶ峰（標高312m）、西に城山（標高494.1m）、石谷山（標高754.1m）、雲野尾峠（標高400m）が続く。市域を流れる河川は山麓部に源を発し、西から沼川、安良川、大木川、秋光川が南流して筑後川へと注ぐ。これらの山麓から南へと丘陵が枝葉状にのび、この間には多くの谷が形成され、丘陵先端付近には現在の市街地が広がる。大木川左岸一帯と沼川流域一帯には洪積層が発達し、市街地の南には洪積平野が広がる。群石山麓下で大木川は神辺扇状地、安良川は養父扇状地を形成する。

2. 歴史的環境

市内には、既に湮滅したものを含め、旧石器時代以降の約190の遺跡が確認されている。ここでは弥生時代から古墳時代を中心として述べる。

弥生時代の前期後葉までは様相は明らかではない。前期の遺跡は、山下川の支流である本川川の開析する狭長な谷に面した標高40～60mの中・高位段丘に立地する柚比・今町地区の一群と、筑紫平野に面した標高15～30mの中位段丘先端に立地する一群とに分けられる。水稻耕作を生産基盤と考えた場合、明らかに立地に差異があり、前者は水捌けの悪い生産性の劣弱な土地であるが、可耕地としての集約度が高い。柚比遺跡群の八ツ並金丸遺跡と朝日山南側にある村田三本松遺跡や大久保遺跡、梅坂炭化米遺跡、安永田遺跡、フケ遺跡などのほか、真木宮の前遺跡、元古賀遺跡、京町遺跡など市内各所で集落が営まれ始める。後者では前期末頃に大木川左岸と安良川右岸、沼川流域に集落の形成が始まる。集落遺跡は、柚比遺跡群の八ツ並金丸遺跡と朝日山南側にある村田三本松遺跡の2か所が知られる。代表的な墳墓遺跡としては、柚比梅坂遺跡が挙げられる。中期前葉に成立し、中期後葉まで継続している。この時期には長期に渡り継続して墓地を営む傾向があり、集落規模も拡大したのであろう。柚比・今町地区では、中期中葉から後半に集落規模が拡大することが知られており、集落の集中化と拡大現象が顕著に表れる。丘陵上の活用と狭小な水田可耕地の集約化が行われたのであろう。中・高位段丘上で営まれた集落は、中期中頃には低位段丘へも広がりを見せる。この時期安永田遺跡では、銅矛や銅鐸の鑄造・銅戈や鉄剣の副葬などが行われる。さらに墳墓に対する土器祭祀が盛行し、フケ遺跡や安永田遺跡287区では、鳥栖市特有の長脚祭祀用高坏が出土するなど、固有の集団関係を形成していることがうかがえる。

中期末以降、前時期まで集落の集中を見せた柚比・今町地区一帯では、八並遺跡・平原遺跡が存続するのみで、現在の鳥栖市街地が立地する低位段丘上に長ノ原遺跡、本原遺跡などの集落が展開する。後期になると、丘陵部にほとんど遺跡が見られなくなり、遺跡立地が大きく変化していく様子がうかがえる。本原遺跡は後期前葉～中葉の短期間に営まれた集落で、集落の一辺に条濠を巡らせ、6軒以上の住居跡で構成されており、規模は小さいもののこの時期の典型的な集落と考えられる。集落の低位段丘上への進出は、古墳時代前期初頭まで継続して見られ、四ツ木遺跡、下原遺跡、姫方遺跡など、低位段丘の縁辺部に立地する。後期後半以降の集落遺跡としては、蔵上遺跡が挙げられる。調査地区より西では安良川の氾濫原で砂礫層となっており、遺構が確認されていない。この状況は南に立地する桑ノ木添遺跡、内精遺跡でも同様である。当該

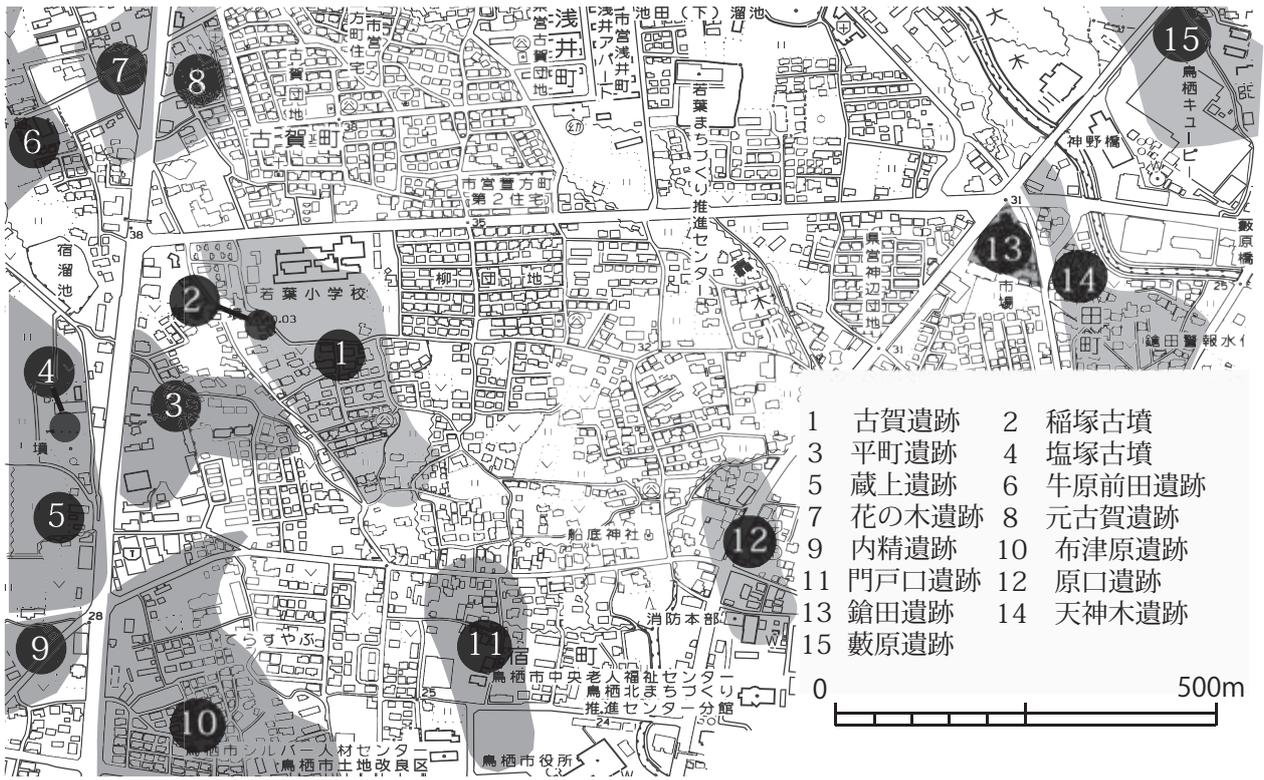


図1 遺跡分布図 (1/10,000)

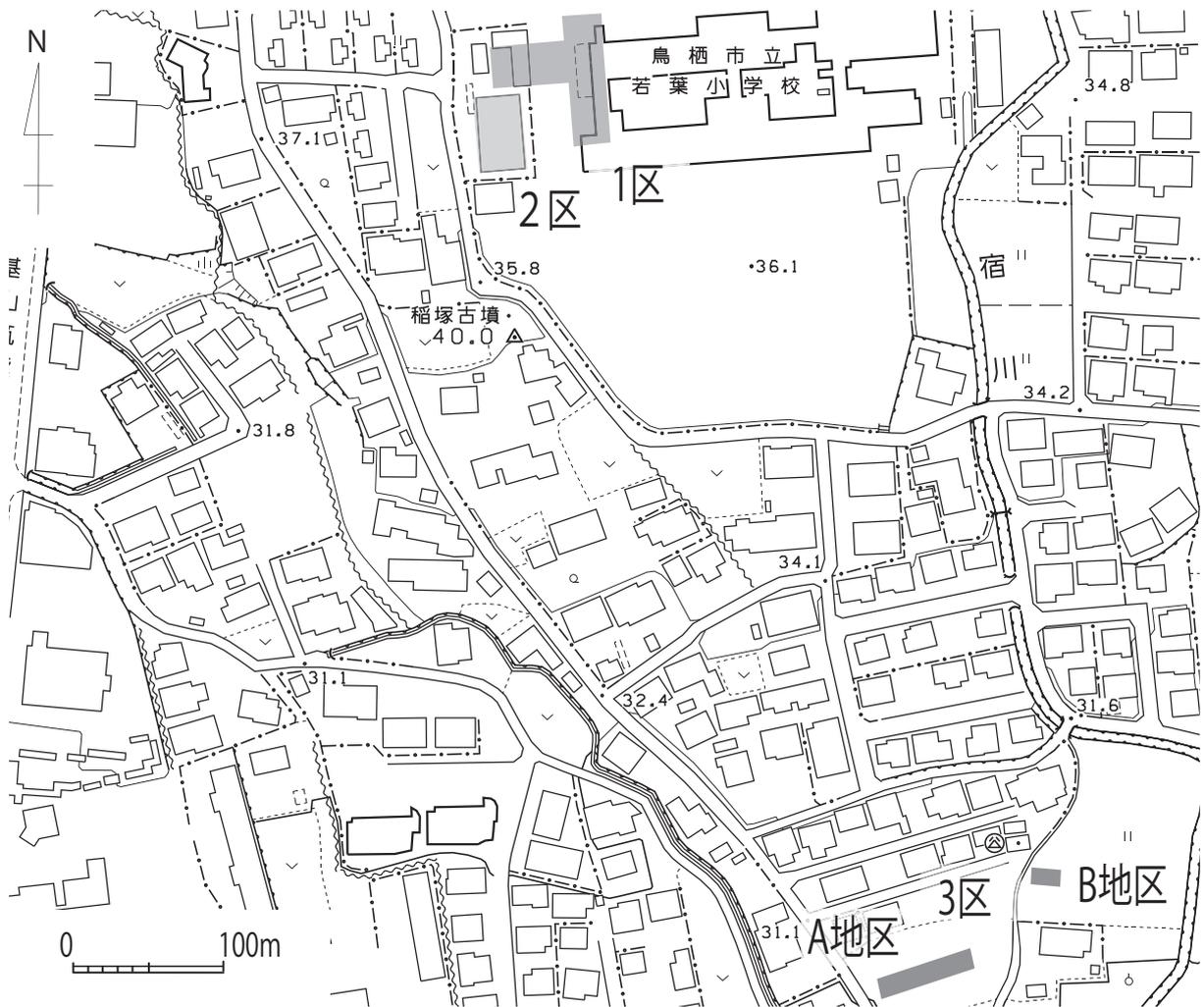


図2 調査区配置図 (1/5,000)

期の遺構は、調査区西南部に集中しており、内精遺跡から連続する集落の北端であることがわかっている。内精遺跡は、弥生時代後期前半から集落の形成が始まる。後期後半には集落規模が飛躍的に大きくなり、後期終末に最盛期を迎える。古墳時代初頭にはいと、住居の数は激減し、平面プランは長方形から方形へと移行している。遺跡中央を南北に走る谷からは後期後半を中心とする遺物が出土しており、安良川の氾濫によるものと考えられる。この谷部周辺には後期後半までの住居は見られず、立地するのは終末期以降で、神辺、養父両扇状地における集落の展開も終末期以降が主体である。

赤坂古墳は3世紀後半の築造と考えられる推定全長24mの前方後方墳で、主体部は確認されていないが、周溝内から古式土師器が出土した。4世紀代には下原遺跡、今泉遺跡、本川原遺跡、日岸田遺跡で方形周溝墓が築造される。4世紀後半～5世紀代の墳墓は少ないものの、安良川右岸域の薄尾古墳群は、埋葬施設及び副葬品から5世紀初頭～中頃の築造と考えられ、ほぼ同時期に山浦、所熊山古墳群が築造される。5世紀中頃に比定される山浦10号墳が径18mを測るが、その他はいずれも径10m内外の小円墳である。古墳の規模・副葬品ともに貧弱であり、突出した有力首長層の出現は認められない。小地域を単位とする有力世帯の自立強化、それを基盤とする造墓集団の拡大という方向がうかがわれる。太田東方古墳は、5世紀後半代の築造と推定される竪穴系横口式石室を主体部にもつ円墳で、赤坂古墳と同じ丘陵に立地する。発掘調査が行われないうまま消滅したため、詳細は不明である。古墳時代前期～中期にかけてはまとまった集落が確認されておらず、立地・分布等不明瞭な点が多い。6世紀前半以降、急速に前方後円墳の築造が開始される。大木川の東岸には、荻野の高位段丘があり、剣塚、庚申堂塚、岡寺などの大型前方後円墳や田代太田、ヒヤーガンサンなどの装飾古墳が築造される。これら古墳が築造された5～6世紀代のまとまった集落跡は確認されていない。6世紀後半以降には、脊振山脈山麓に東十郎・杓子ヶ峰・深底・都谷・永田古墳群などの600基を超える群集墳が造営される。この段階になると、元古賀・蔵上・内精・梅坂炭化米遺跡等で集落が確認できる。



図3 古賀遺跡3区遺構配置図 (1/300)

第3章 調査の内容

遺跡の概要

古賀遺跡は安良川と大木川のほぼ中間に位置し、標高 30～50m を測る養父・神辺の両扇状地とが複合する扇状地上に立地する。弥生時代前期末に集落の形成が始まり、弥生時代中期初頭に最盛期を迎える。これまでに 1・2 区の調査（市報第 2 集）を実施しており、弥生時代の土坑 1 基、溝 1 条、3 棟の掘立柱建物、土壙墓 1 基、平安時代と見られる溝数条が検出されている。

3 区は、佐賀川久保鳥栖線と久留米基山筑紫野線が交差する地点から北東に 600m。1・2 区から南西へ 400m に位置する。標高は約 30 m を測り、検出された主な遺構は住居跡 3 軒、溝 1 条、土坑 1 基である。そのほかピット 159 基を検出した。調査区の東に広がる谷の存在から、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけて営まれた集落の縁辺にあたると思われる。

第4章 古賀遺跡 3 区の調査

1. 竪穴住居跡（SH）

SH301・303 は切り合い関係を検出時に判断できなかったため、SH301 床面検出時まで出土遺物が混ざった状況で取り上げを行っている。ここでは確実に各住居跡から出土した遺物のみを報告し、不明分は後述する。

SH301（図 4 図版 2）

SH301 は、調査区の南西に位置し、一部調査区を拡張して調査を実施した。平面プランは隅丸長方形で、長軸 6.60m、短軸 4.92m を測る。SH303 に切られる。床面の高さは検出面より 0.22m～0.5m を測る。床面に複数のピットが確認されたが、支柱穴は不明である。南東角に屋内土坑があり、平面プラン卵形で長軸 1.10m、短軸 0.73m を測る。

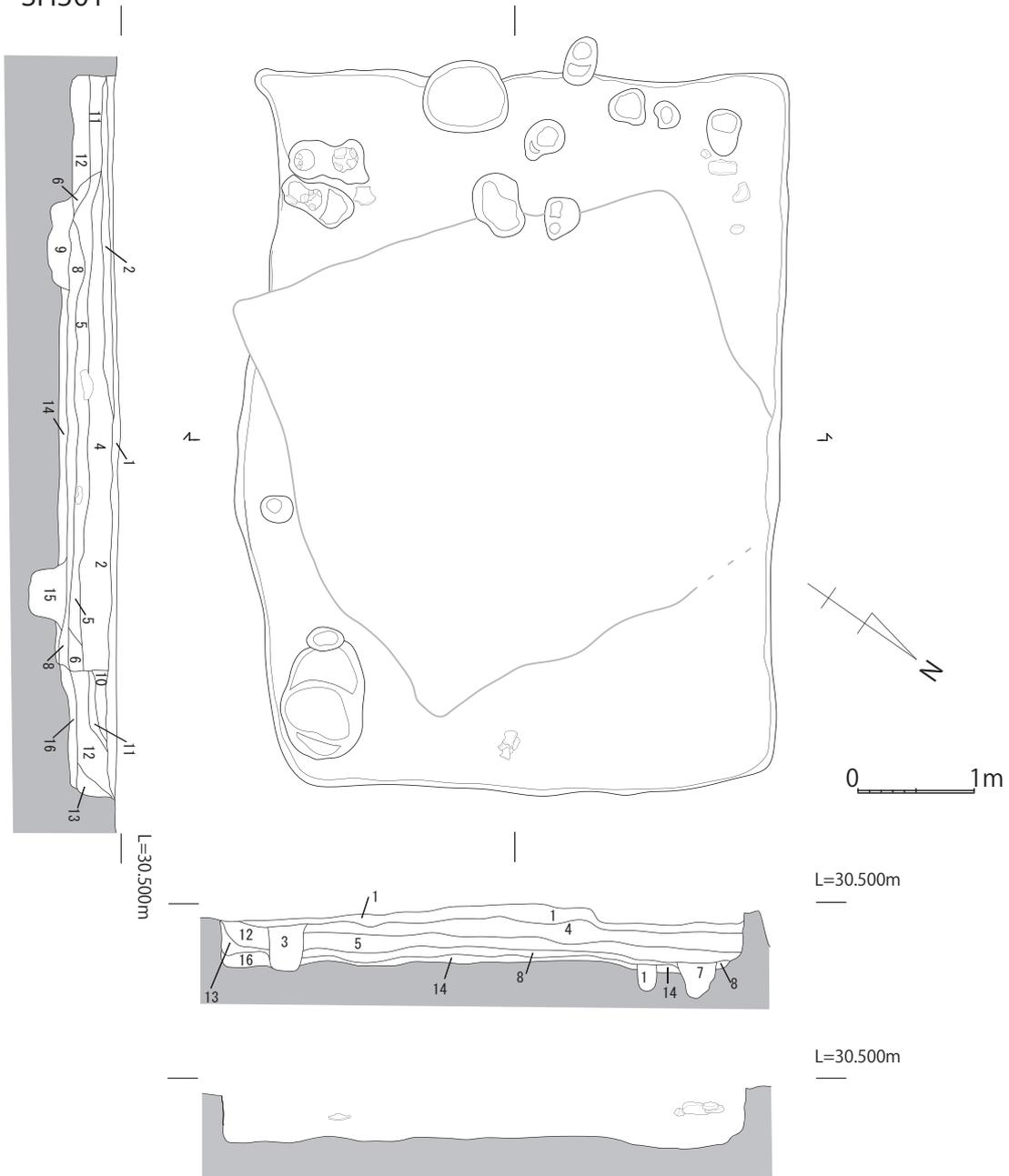
埋土中から多数の自然石が出土しており、埋没時の流れ込みと考えられる。出土遺物で図示しえたものは少ない。庄内式併行期新段階の廃絶と考えられる。

出土遺物（図 5・6 図版 4-1・2、8-14・15）

1、2 は鉢である。1 は深鉢として図化したが、最終整理の段階で図 14-7 と接合することが判明した。図化の際に傾きを見誤っている。短頸壺である。

1 は北東壁付近から出土した鉄斧である。床面から約 15cm 浮いた状態であった。流れ込みと考えられる。残存長 6.6cm、最大幅 4.1cm、最大厚は 2.3cm を測る。2 は鉄鏃で土器群の直上から出土した。残存長 8.3cm、最大幅 3.1cm、最大厚は 0.75cm を測る。

SH301



- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1. 暗褐色土 | 10. 黒褐色土 |
| 2. 黒灰色土 | 11. 黄褐色土 |
| 3. 黒色土 | 12. 黒褐色土 |
| 4. 暗黄褐色土 | 13. 暗黄褐色土 |
| 5. 黒褐色土 (円礫・土器片を多く含む) | 14. 明黄褐色土 |
| 6. 黒褐色土 (黄褐色土を多く含む) | 15. 明黄褐色土 (黒色土を含む) |
| 7. 灰黒色土 | 16. 褐色土 (黒色土を少量含む) |
| 8. 黒褐色土 (褐色土ブロックを多く含む) | 17. 黒色土 (褐色土を多く含む) |
| 9. 黒色土 | |

※第4～6・8・14層はSH303埋土

※第10～13・16層はSH301埋土

図4 SH301 (1/60)

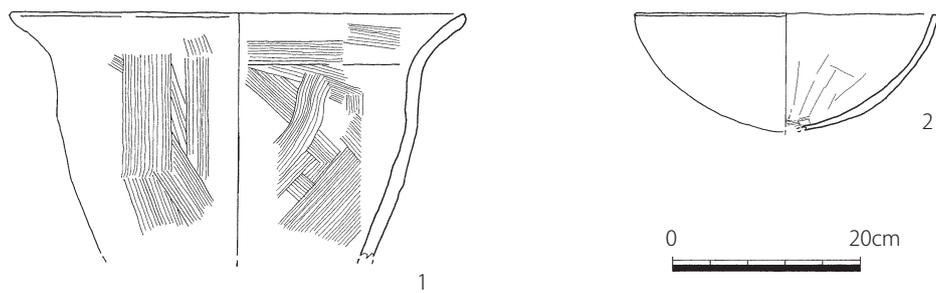


图5 SH301 出土土器 (1/4)

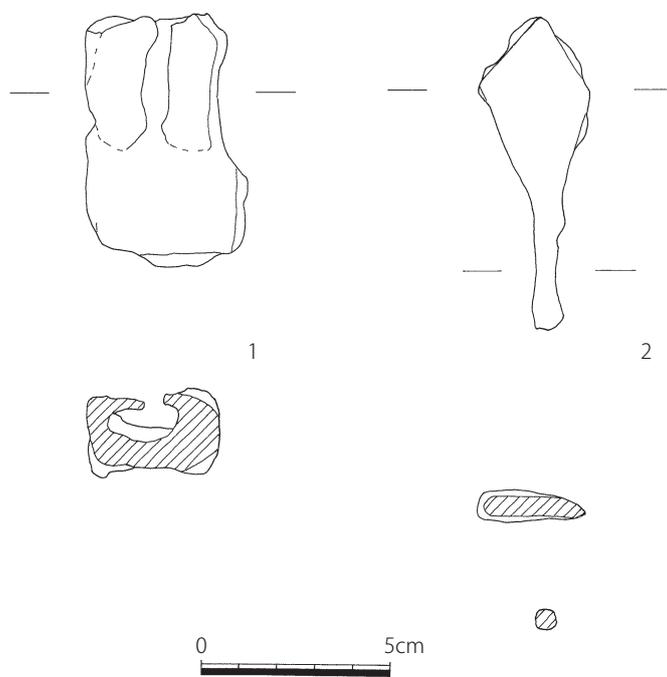
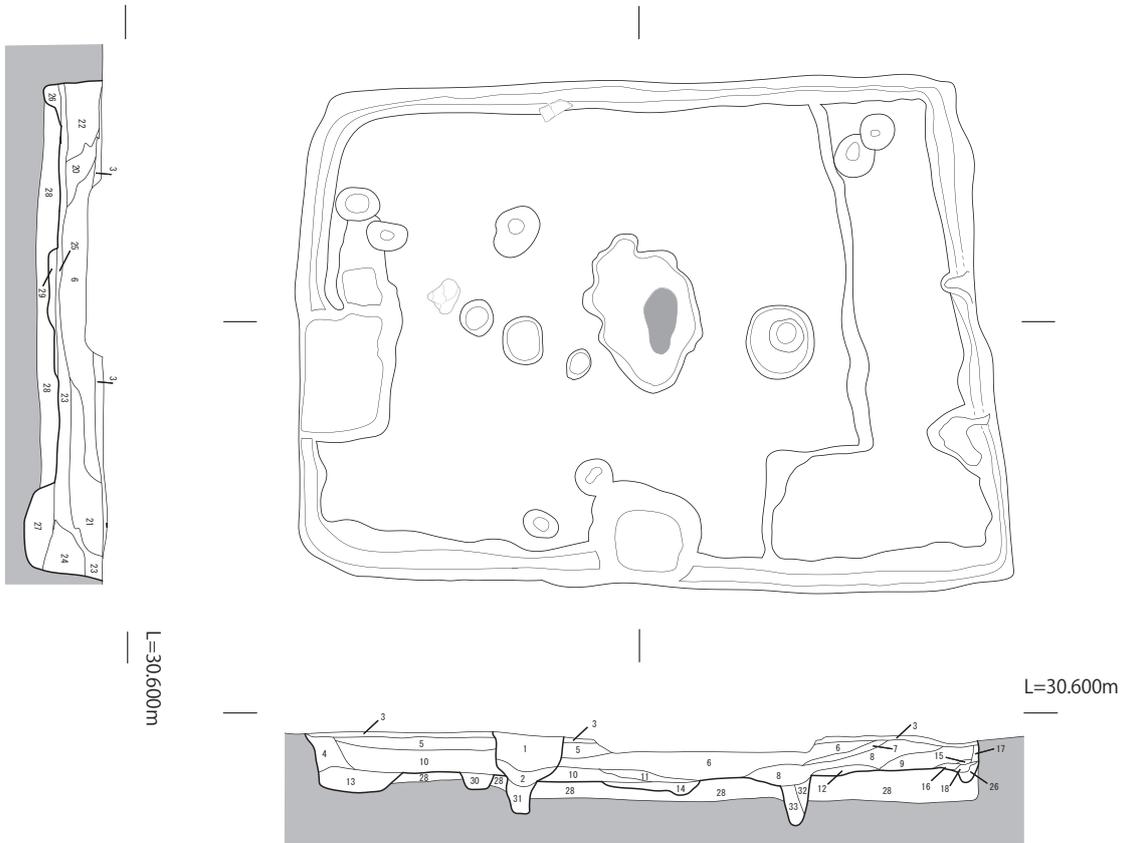
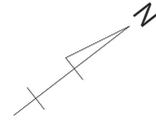


图6 SH301 出土铁器 (1/2)

SH302

0 1m



- | | | |
|-----------------------|------------------------|----------------------------|
| 1. 暗褐色土 | 12. 灰黒色土に暗褐色土が混ざる | 23. 灰黒色土(黄褐色土ブロックを少し含む) |
| 2. 灰黒色土 | 13. 褐色土と淡灰黒色土が混ざる | 24. 濃褐色土(土器片をわずかに含む) |
| 3. 灰黒色土 | 14. 暗褐色土と灰黒色土が混ざる | 25. 暗褐色土と灰黒色土が混ざる |
| 4. 暗褐色土(黄褐色粘土をやや多く含む) | 15. 暗褐色土(焼土を多く含む) | 26. 褐色土と灰黒色土が混ざる |
| 5. 淡灰黒色土 | 16. 灰色土 | 27. 暗褐色土 |
| 6. 淡灰黒色土(第5層より明るい) | 17. 暗褐色土 | 28. 暗黄褐色土(灰黒色土ブロックをわずかに含む) |
| 7. 灰黒色土 | 18. 暗褐色土(焼土をわずかに含む) | 29. 淡灰黒色土(焼土をわずかに含む) |
| 8. 灰黒色土(灰色土ブロックが混ざる) | 19. 淡灰色土 | 30. 灰黒色土 |
| 9. 暗褐色土(土器片をわずかに含む) | 20. 灰黒色土(黄褐色土ブロックを含む) | 31. 暗褐色土 |
| 10. 淡灰黒色土(土器片をわずかに含む) | 21. 淡灰黒色土 | 32. 暗黄褐色土と灰黒色土が混ざる |
| 11. 暗褐色土 | 22. 灰黒色土(粒状の黄褐色土を多く含む) | 33. 極暗褐色土 |

図7 SH302 (1/60)

SH302 (図7 図版3)

調査区中央やや南寄りで見出された住居跡である。平面プランはやや台形状を呈する隅丸長方形で、東西軸のうち北壁は4.79m、南壁は5.46m、南北軸3.86mを測る。長軸上に2本の支柱穴を確認した。支柱穴間は芯々で2.38mを測り、柱間に不整楕円形の地床炉を設ける。地床炉の中央やや東寄りには焼土が広がる。建物東壁から南壁にかけてL字状の高床面をもつ。床面からの比高差は約4～8cmを測る。建物南側西寄りにもわずかに高床面状の空間が見られるが、不明瞭である。第28層は貼床で、高床面も貼床で構築されている。建物西側と南側床面に屋内土坑が確認でき、西側壁際の屋内土坑は北側にステップ状の段をもつ。周壁溝はしっかりとしており、貼床及び高床面を掘り込んで全周する。東壁高床面上で焼土を含む粘土塊が部分的に広がっているが性格不明。

出土遺物から埋没時期は弥生時代後期終末以降と考えられる。なお、2本柱の長方形住居でベッド状遺構をもつなど、建物構造からも弥生時代後期終末に帰属すると考えられる。

出土遺物 (図8 図版4-3~6)

遺物はいずれも摩滅しており、埋土中から出土していることから流れ込みと考えられる。住居の使用時期を直接示すものではない。1は甕、2～4は鉢、5、6は器台である。2は内外面に帯状のススが付着する。4は口径9.8cmで復元したが、小片のため口径が大きくなる可能性がある。6は小型の器台で、脚部に2条の工具痕が見られるが、摩滅により詳細は不明である。脚内面中央には指頭を押し込み、くぼみをつくる。

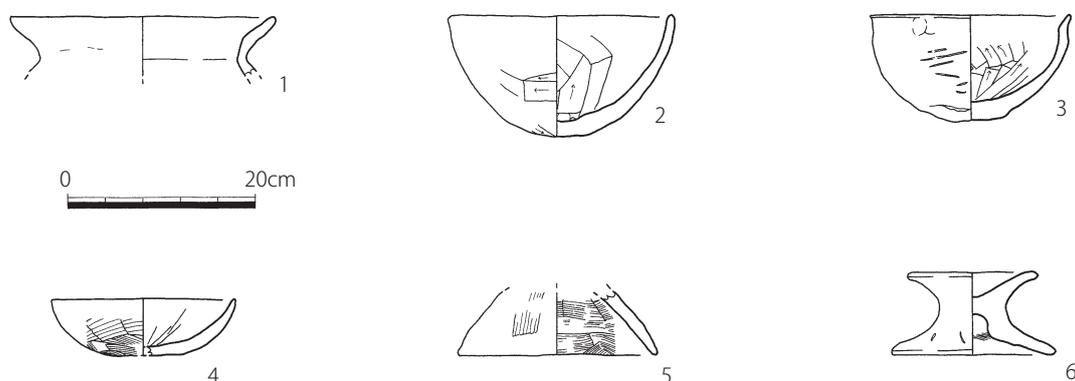


図8 SH302 出土土器 (1/4)

SH303 (図9 図版2)

SH301を切る住居跡である。SH301の掘り方にほぼ入り込んでいる。前述のとおり遺構検出時に切り合い関係を見落とし、SH301の床面検出中に確認した。平面プランはやや台形状を呈する方形で、長軸4.22m、短軸は北壁で3.64m、南壁で4.05mを測る。

中央付近から多量の土器と自然石が集積されたような状態で出土した。一部は床面直上から。そのほかは床面から浮いた状態で出土した。住居廃絶後に投棄されたものであろう。住居跡の帰属時期は床面直上の土器から庄内併行期新段階と考えられるが、やや新しい様相も見られることから、庄内布留転換期まで下る可能性がある。

出土遺物 (図 10～12 図版 4-7～15、5-1～13)

出土した器種は壺、甕、鉢、甑、高坏、器台、ミニチュア土器である。7、11、29 は床面直上から。そのほかは床面から浮いた状態で出土。6 は口縁を一部欠くがほぼ完形で柱穴から出土した。柱抜き取り後に埋置したものか。9 は長頸壺で口縁部を打ち欠く。体部中位に穿孔あり。24 は特徴的な甕で、口縁部は直線的にのび、体部中位に胴部最大径をとる。底部は平底で外面未調整である。体部上半は粗雑な調整で、粘土帯の接合面を消しきれていない。一方、口縁部と体部下半は丁寧な調整である。煤や焦げは見られない。31 も特徴的な器形で類例を見ない。高坏であろうか。脚部は中実で、尖底気味の坏部がのる。坏部中位には明瞭な段をつくり、段より下位はミガキ後ナデ、上位はハケ目調整後、化粧土を塗りミガキを施す。口縁端部は外反し丸くおさめる。

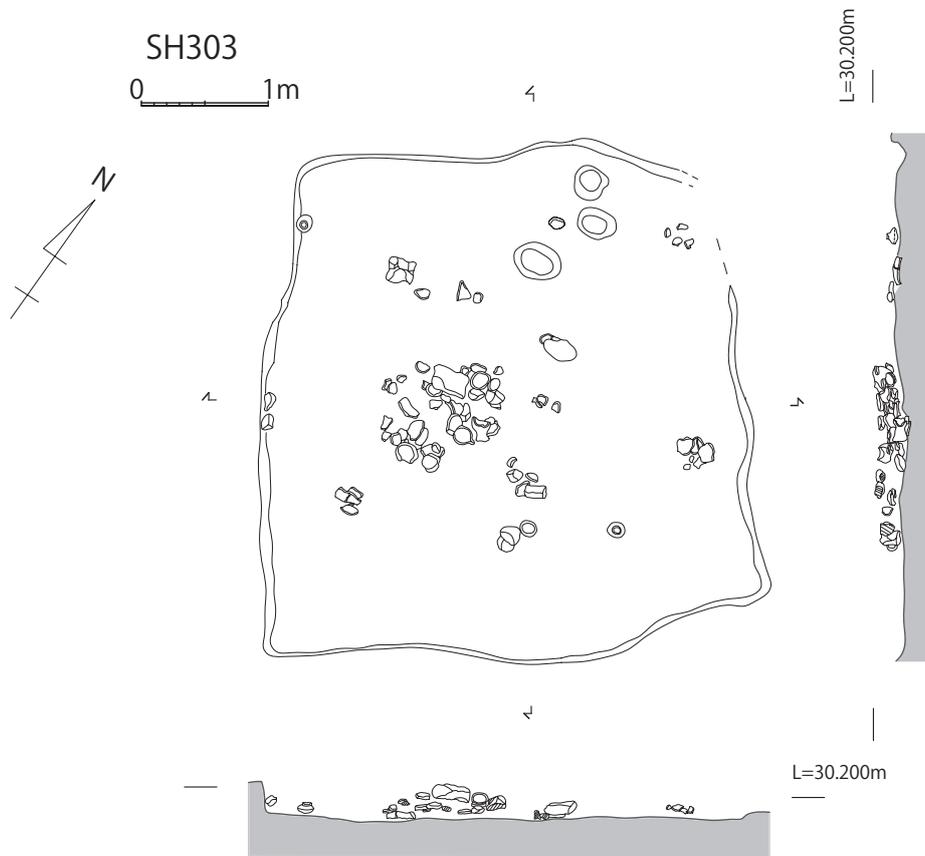


図 9 SH303 (1/60)

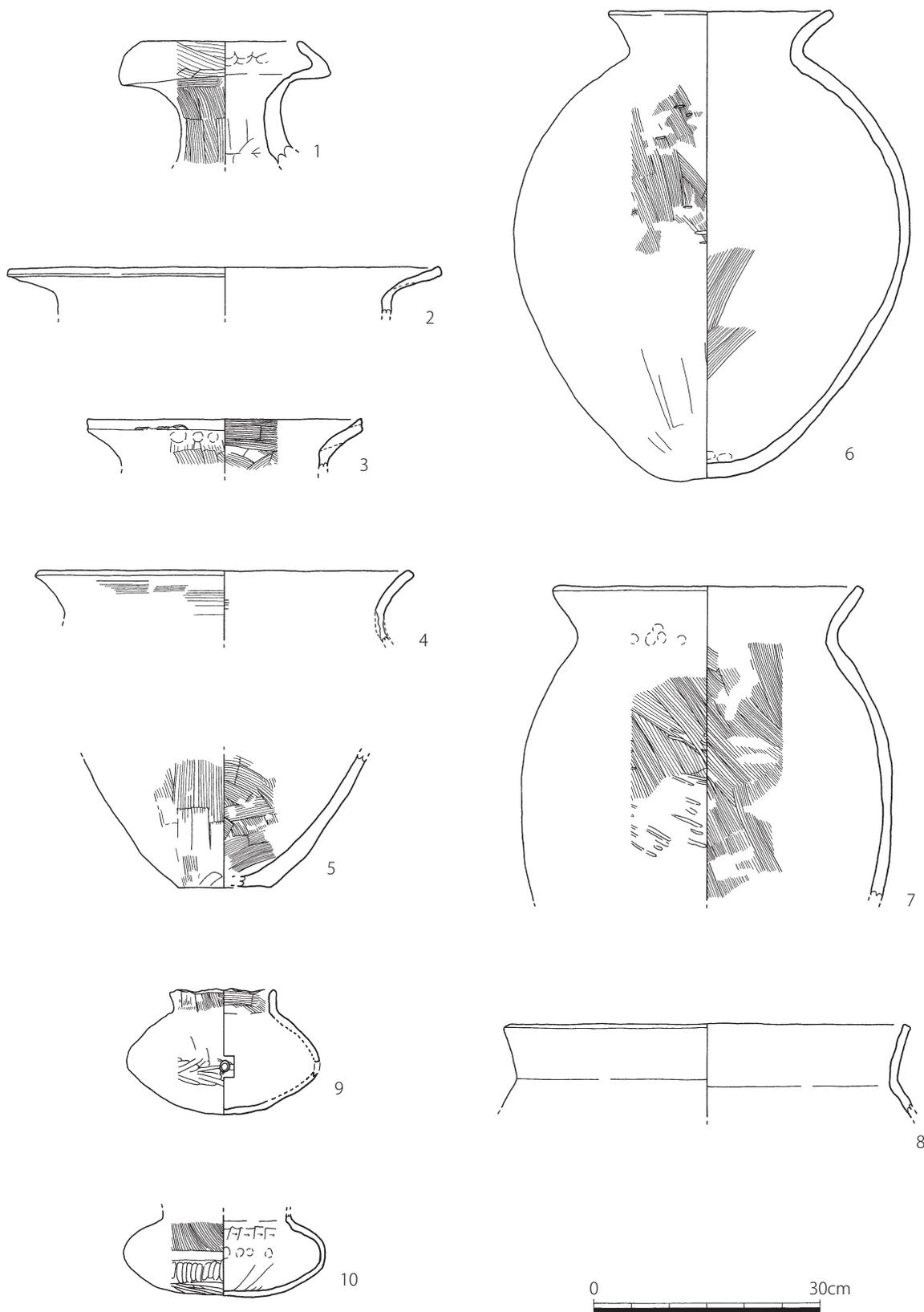


图 10 SH303 出土土器① (1/4)

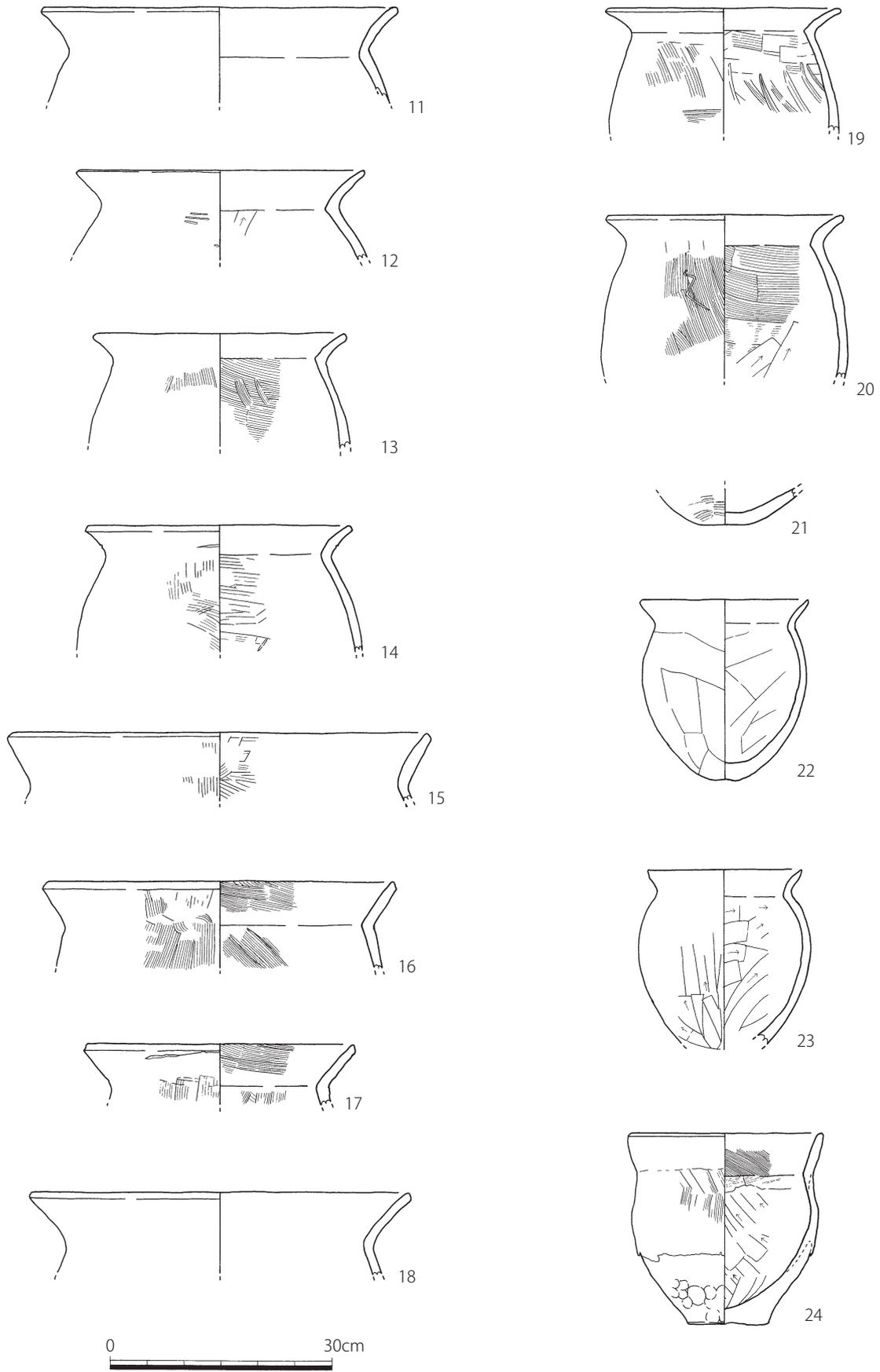


图 11 SH303 出土土器② (1/4)

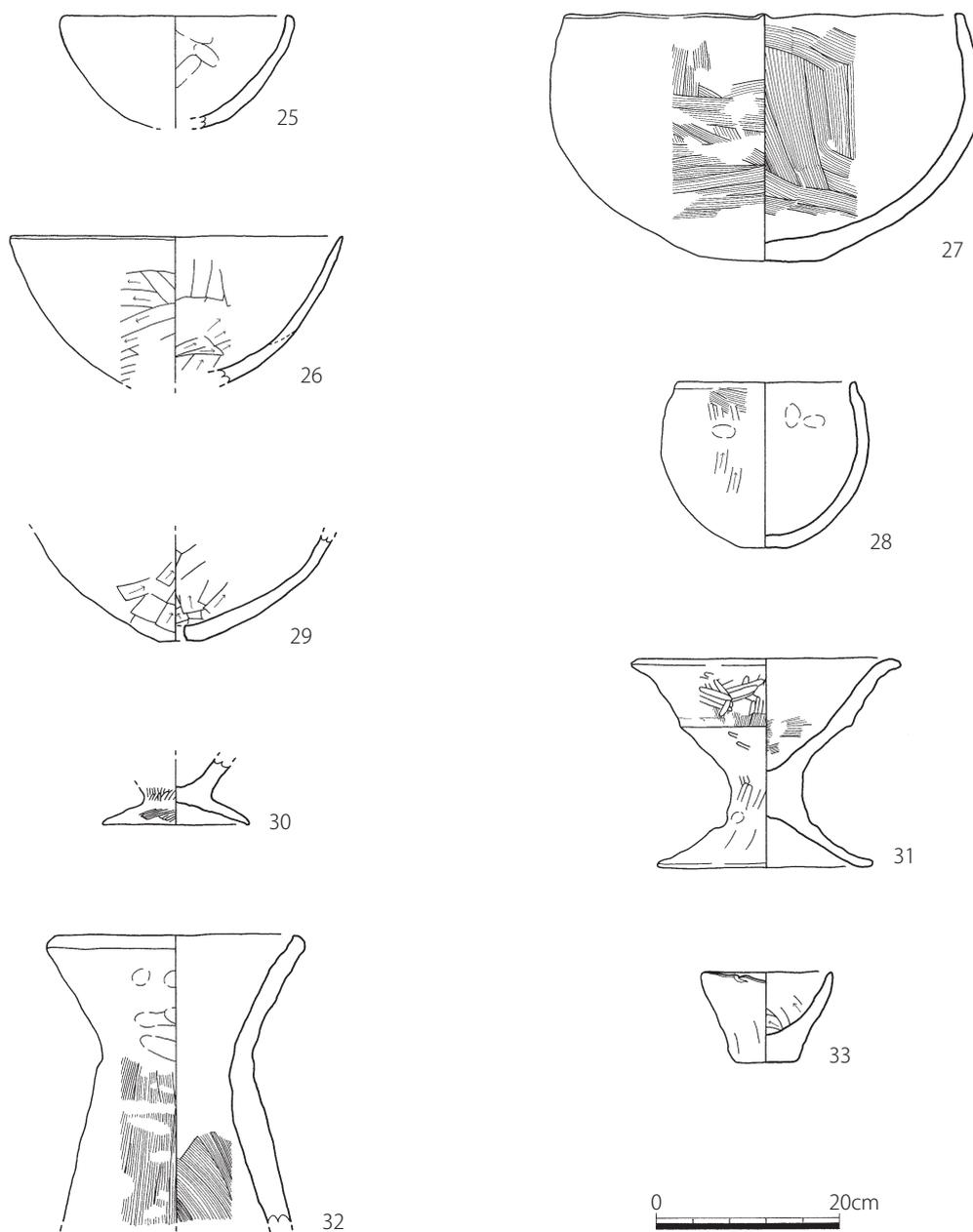


图 12 SH303 出土土器③ (1/4)

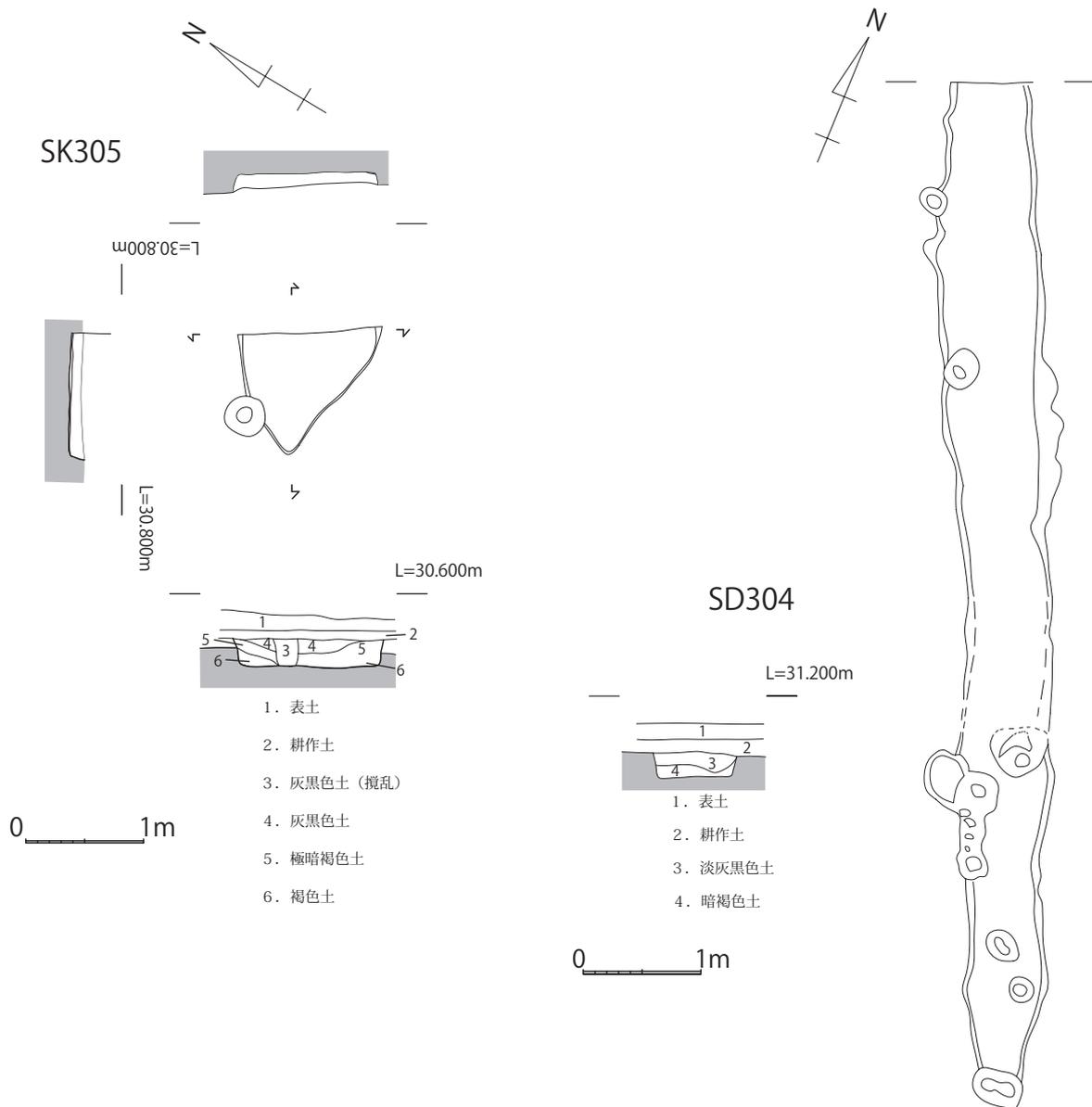


図 13 SD304・SK305 (1/60)

2. 溝 (SD)

SD304 (図 13)

A区中央付近で検出した南北方向の溝である。現況で長さ 9.3m を測り、南壁手前で収束する。北側は調査区外へと延びる。断面は逆台形状を呈し、床面は平坦で北から南へと緩やかに傾斜する。最大幅は 0.88m、深さは検出面より最大 0.23m を測る。土層は水平堆積に近く、比較的短期間に埋没したと考えられる。出土遺物は埋土中から出土したがいずれも小片で、図化に耐えられるものはない。SH301 と軸が合っているものの、住居跡との関係は不明である。

3. 土坑 (SK)

SK305 (図 13)

A区東端で検出した不定形の土坑である。東側は調査区外へと続く。現況で東西 1.09m、南北 1.28m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。現代の耕作土直下から掘り込まれており、新しい時代の遺構と考えられる。出土遺物は小型甕の底部 1 点であるが、図化に耐えなかった。

4. ピット (P)

調査区からは多数のピットが検出された。精査を行ったが、並びをもつものは確認できなかった。検出された 159 基のピットのうち、5 基から遺物が出土したが、いずれも小片で図化に耐えなかった。

5. その他 (SH301・303)

前述のとおり、SH301・303 埋土出土遺物は切り合い関係の見落としから一括で取り上げを行った。出土土器はローリングを受けている破片がほとんどで、接合できるものは少なかった。図示しえなかったが、わずかに須恵器片が出土していることから、住居跡を切るピットが存在したのと考えられる。

SH301・303 出土遺物 (図 14～17 図版 5－14・15、図版 6～8－1～13)

出土した土器は壺、甕、鉢、甑、台付鉢、高坏、器台、ミニチュア土器である。

1～3 は二重口縁壺である。1 は畿内系で、胎土、色調、調整から在地生産ではないと考えられる。2 は反転部から剥離した口縁部で口縁端部を欠く。3 は反転部に竹管文を施す。5 は頸部が垂直にのびるタイプの広口壺か。6～9 は短頸壺、10～16 は直口壺で、12～16 はいわゆる小型丸底罎である。14 は口縁端部のつくりがあまい。17～23 は甕が含まれる可能性もあるが底部である。平底から丸底までバリエーションに富む。24、25 は長頸壺である。

26～45 は甕である。全体像が明らかなのは出土していない。26～29、31、32 は在地の長胴甕である。30 は短頸壺か。33～40 は口縁部が外反しながら強く外傾する。33、36、38 は口縁端部を強くつまむ。41～44 は調整から甕の底部と考えられる。45 は口縁部を欠くが球胴形を呈する。

46～69 は鉢である。46～56 は平底で、うち 6 点は上げ底である。50～56 はしっかりとした底部をつくる。56 は底部と体部の接合があまい。57～62 は丸底を呈する坏形で、61 は大型品となろうか。63、64 は平底で体部から口縁部が上方に立ち上がる碗形である。65～67 は外反口縁鉢で、65 は大型品で内外面ともにミガキを施し、口縁部外面はカキ目状の粗いハケ目を施す。68 は内湾する口縁をもつ。69 は浅い皿状を呈する。70、71 は単孔の甑である。72～74 は台付鉢で 73・74 は脚部が浅い。75 は口縁部小片で、反りが弱い外反口縁鉢か。

76～90 は高坏である。76 は口縁部が接合しないが胎土、色調から同一個体と考え図上復元した。77～86 は短脚で脚部に穿孔を施すものが多い。脚端部が内湾するもの、裾が広がるもの、直線的にのびるものがある。87 は脚部から直線的にのびる坏部をもつ。88、89 は中実の脚部である。90 は庄内系碗形高坏。91 は屈曲の弱い筒形器台、92 は有孔器台、93 は脚部を欠くが器台か。94、95 は高坏もしくは台付鉢形のミニチュア土器、96、97 は鉢形のミニチュア土器である。

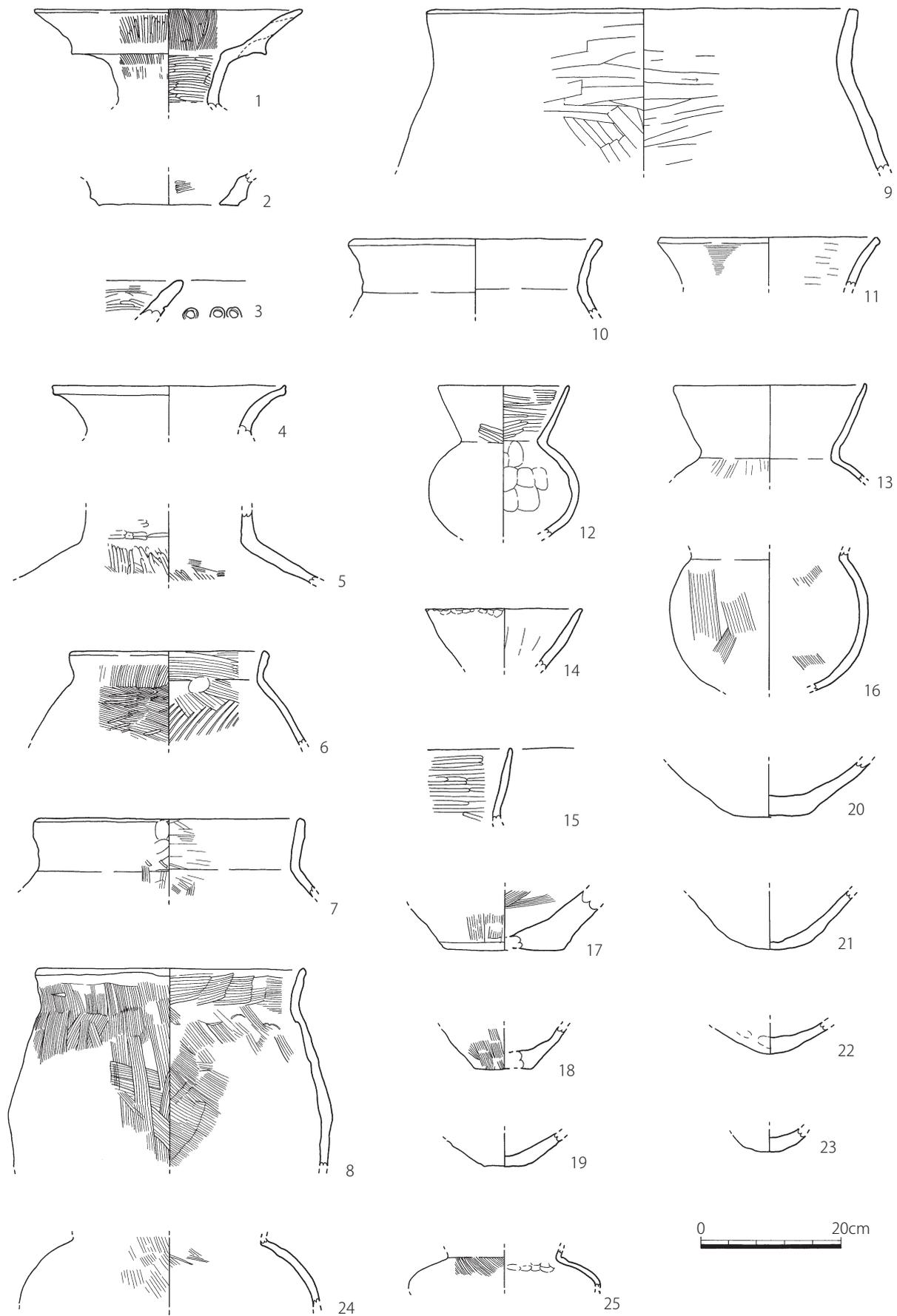


图 14 SH301·303 出土土器① (1/4)

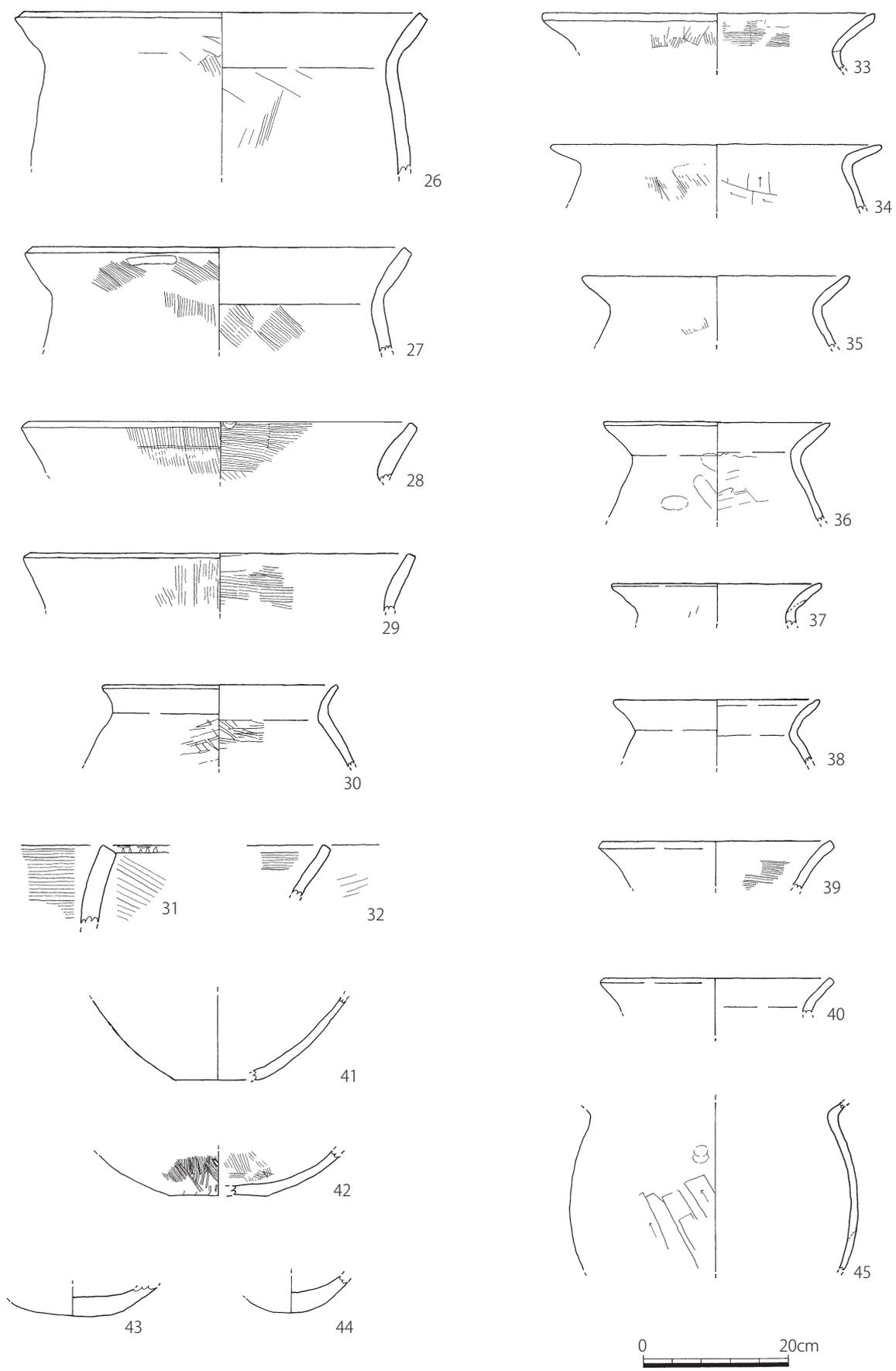


图 15 SH301·303 出土土器② (1/4)

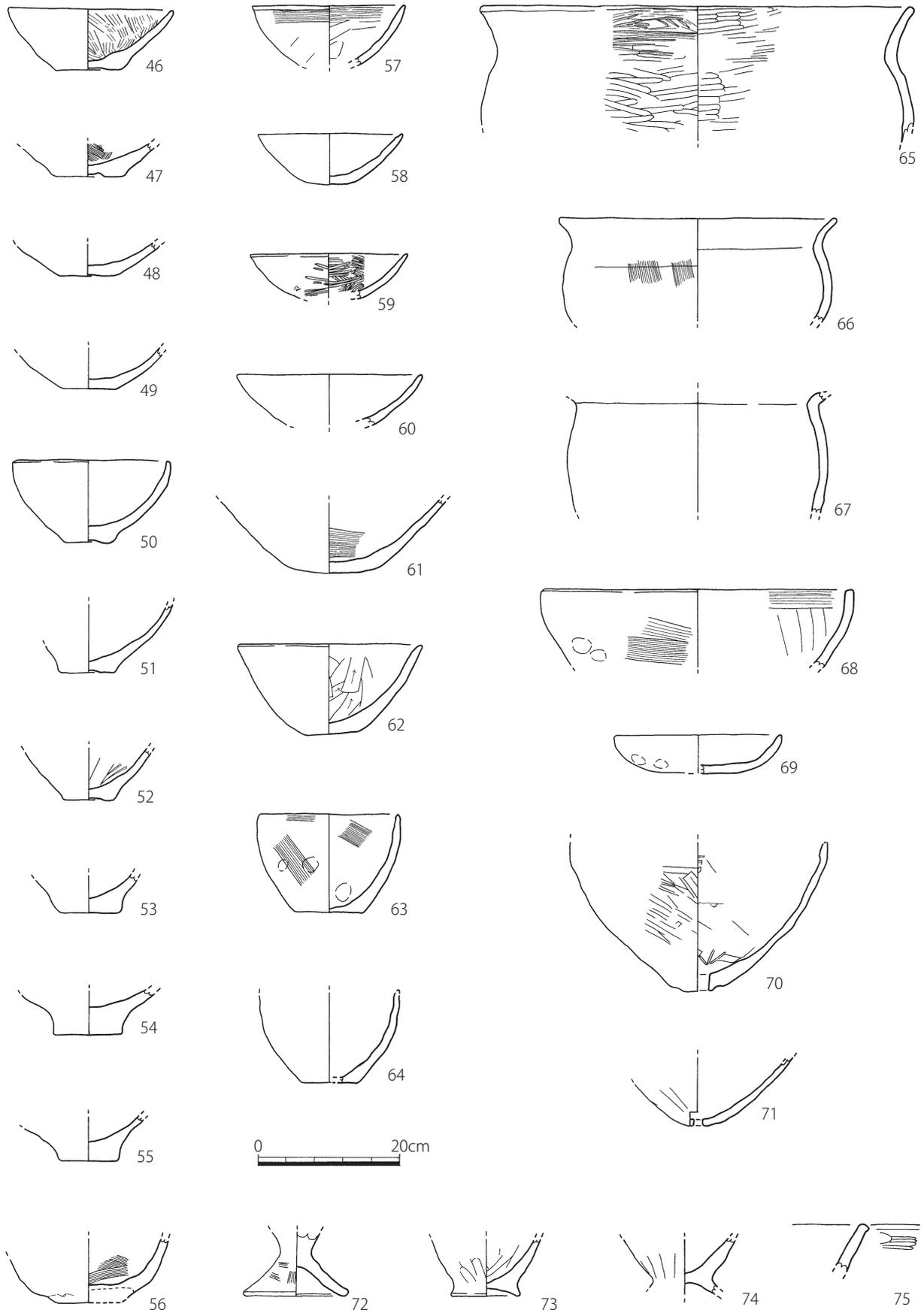


图 16 SH301·303 出土土器③ (1/4)

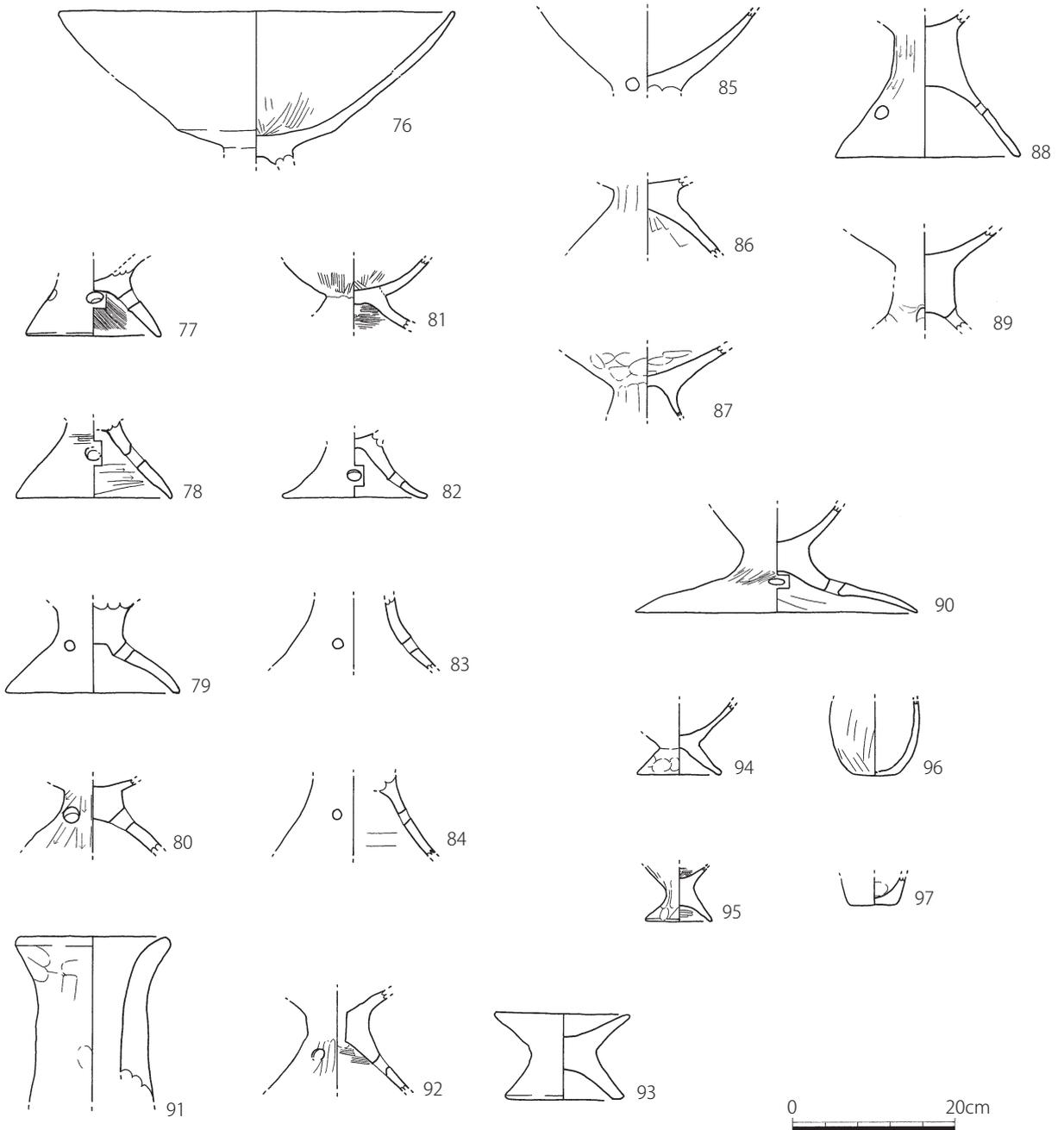


图 17 SH301 · 303 出土土器④ (1/4)

第5章 まとめ

古賀遺跡3区は、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭にかけて営まれた集落である。まず立地についてであるが、東側は谷状の落ち込みとなることがこれまでの調査で明らかとなっており、集落の縁辺部に位置すると考えられる。また、本調査区のすぐ北側は丘陵地が削平されており、表土直下で基盤層が確認されている。その東側では河原石が表土直下で検出されている。面的に広がること、当該地が扇状地であることから、河川ではなく上流域から流れ込み堆積したものと考えられる。

次に各住居の帰属時期について見ていきたい。先述のとおり SH301・303 は切り合い関係の見落としから、ほとんどの出土遺物を一括で取り上げてしまっているため、詳細は明らかにできていない。ここでは、各住居跡出土遺物からそれぞれの帰属時期を検討する。古賀遺跡3区の出土遺物は、大きく弥生時代後期前半、弥生時代後期終末～古墳時代前期前半頃のものが見られる。

まず、SH301・303 出土土器を見てみる。出土遺物は、庄内式併行期新段階と布留式併行期古段階が主体をなし、各時期の土器がほぼ同程度出土している。次に SH301 の柱穴からは、庄内式新相段階の壺がほぼ完形で出土している。底部は尖底気味で、器形はやや古手の様相を示すが、外面にハケ目を施すなど新しい調整技法を取り入れている。出土状況から柱抜き取り後の柱穴に埋置されたと考えられ、SH301 は庄内式土器新段階に比定される。その他の出土遺物からもこの時期の廃絶と考えて矛盾はない。SH303 は SH301 との切り合い関係から後出することは明らかである。出土した長頸壺など、主体は布留式土器古段階のもので占められている。したがって、SH303 は古墳時代前期初頭に帰属するものとする。SH302 は住居跡に伴う明確な出土遺物はなく、いずれも埋土中からの出土である。住居跡は平面長方形の2本柱で、高床面（ベッド状遺構）をもち、カマドを有しないことから、弥生時代後期終末と考えられる。SH301 と軸が異なることから、先後関係は不明であるが、前後する近い時期と考えられる。

本遺跡の器種組成を見てみると、同時期で立地が近接する内精遺跡、蔵上遺跡とは様相が異なる。図15の1、3に示す二重口縁壺は外来系と考えられ、図17の90に示す庄内系椀形高坏は胎土・焼成から在地生産品であろう。そのほかはいずれも在地生産品と考えられる。また、長脚の高坏が少ない点が特徴として挙げられ、周辺では藪原遺跡が同様の傾向を示している。

鳥栖市内において当該期に営まれた集落は大きく3つのグループに分けることができる。平原遺跡、本川原遺跡は赤坂前方後方墳の立地する鳥栖市北東部に位置し、元古賀・蔵上・内精遺跡は鳥栖市街地の西部に。両地点の間に藪原・京町遺跡が立地する。弥生時代後期前半から形成される内精遺跡が、その規模から当該期の拠点的な集落と考えられる。古賀遺跡は鳥栖市街地西部のグループに属するものと考えられる。

弥生時代後期後半以降、鳥栖市内では蔵上・内精遺跡、藤木遺跡、牛原原田遺跡など低位段丘や扇状地上に遺跡の再構成が見られることが知られている。古賀遺跡3区もそのような集落の再構成、集落の展開する様子的一端をうかがわせる。

表1 古賀遺跡3区 出土遺物観察表

土器

量の単位はcm () は元値 < > は残存値

挿図番号	図版番号	遺構	器種	法量			残存状況	胎土	色調		備考	登録番号
				口径	器高	底径			外面	内面		
図5-1	4-1	SH301	甕	(24.2)	<12.7>	-	約1/12	径0.3mm程度の砂粒を少し含む	橙	明褐	図は誤り 短径壺	190001
図5-2	4-2	SH301	鉢	(16.0)	<6.2>	-	約1/2	径8mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	底部欠損	190002
図8-1	4-3	SH302	甕	(14.1)	<3.15>	-	約1/6	径2mm以下の砂粒を含む	灰白	黄白	内面摩滅のため調整不明瞭	190003
図8-2	4-4	SH302	鉢	(12.0)	6.4	-	約2/3	径4mm以下の砂粒をやや多く含む	明黄褐	明黄褐	内外面に帯状のスス付着 内面は摩滅により調整不明瞭	190004
図8-3	4-5	SH302	鉢	10.6	5.7	-	口縁一部欠く	径6mm以下の砂粒を少し含む	暗黄褐	暗黄褐	底部粘土盤の接合が甘い	190005
図8-4	4-3	SH302	鉢	(9.8)	3.0	-	約1/4	径0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	灰褐	淡赤橙	内外面摩滅	190006
図8-5	4-3	SH302	高坏	-	<3.35>	(10.65)	約1/4	径1mm以下の砂粒を少し含む	淡黄橙	淡黄橙	全体に摩滅	190007
図8-6	4-6	SH302	器台	(6.9)	4.4	8.7	脚部1/3 受部3/4欠く	径1mm以下の砂粒をわずかに含む	明黄褐	淡赤褐色	脚部外面に2条の工具痕	190008
図10-1	4-7	SH303	壺	10.5	<8.2>	-	頸部~口縁部	径4mm以下の砂粒をやや多く含む	暗褐	灰黒	頸部器壁極めて厚い 調整粗い	190009
図10-2	-	SH303	壺	(28.8)	<3.1>	-	約1/10	径2mm以下の砂粒をやや多く含む	にぶい橙	橙	傾き・径は異なる可能性あり 甕の可能性あり	190010
図10-3	-	SH303	壺	(18.2)	<3.6>	-	約1/8	径1mm以下の砂粒をわずかに含む	にぶい橙	にぶい橙	口縁端部に粘土を接合する	190011
図10-4	-	SH303	壺	(25.0)	<4.7>	-	約1/8	微砂粒をわずかに含む	明褐灰	灰白	口縁外面にスス付着	190012
図10-5	-	SH303	壺か	-	<8.9>	(6.0)	約1/4	径4mm以下の砂粒を含む	暗灰褐	にぶい黄橙	器壁外面にスス・コゲ付着	190013
図10-6	4-8	SH303 SK2	壺	15.4	31.2	-	口縁一部欠く	径2mm以下の砂粒をやや多く含む	浅黄橙	浅黄橙	帯状の黒斑 対面に点状の黒斑2点	190014
図10-7	4-9	SH303	壺	(20.6)	<20.9>	-	約1/3	径4mm以下の砂粒をやや多く含む	暗褐	にぶい黄橙	体部外面中位以下は摩滅 復元胴部最大径24.4cm	190015
図10-8	-	SH303	壺	(27.0)	<6.2>	-	約1/8	径2mm以下の砂粒を含む	橙	橙	全体的に摩滅する	190016
図10-9	4-10	SH303	壺	-	<8.3>	-	頸部以上欠く	径2mm以下の砂粒を少し含む	にぶい橙	褐	頸部は打ち欠きか 体部中位に穿孔あり	190017
図10-10	4-11	SH303 SK1	壺	-	<5.5>	-	約2/3	径1mm以下の砂粒をわずかに含む	にぶい黄橙	にぶい橙	器壁極めて薄い	190018
図11-11	-	SH303	甕	(24.0)	<6.5>	-	口縁~体部	径1mm以下の砂粒を含む	黒褐	にぶい黄橙	口縁部にスス付着	190019
図11-12	4-13	SH303	甕	(19.4)	<6.0>	-	約1/5	径1mm以下の砂粒をやや多く含む	浅黄橙	灰黒~浅黄橙	内外面摩滅	190020
図11-13	-	SH303	甕	(17.0)	<7.9>	-	約1/4	径3mm以下の砂粒を少し含む	橙	にぶい黄橙	口縁部にスス付着	190021
図11-14	4-14	SH303	甕	(18.0)	<8.6>	-	約1/6	径3mm以下の砂粒を少し含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	口縁部にスス付着	190022
図11-15	-	SH303	甕	(28.4)	<4.7>	-	約1/10	径2mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	にぶい橙	全体的に摩滅する	190023
図11-16	-	SH303 SK1	甕	(23.8)	<6.1>	-	約1/4	径2mm以下の砂粒を含む	灰黒~暗褐	濃橙	同一個体があるが接合しない	190024
図11-17	-	SH303	甕	(18.2)	<4.25>	-	約1/12	径1mm以下の砂粒を含む	橙	暗褐	16と同一か	190025
図11-18	-	SH303	甕	(25.7)	<5.8>	-	約1/16	径1mm以下の砂粒をやや多く含む	橙	橙	外面摩滅	190026
図11-19	4-15	SH303	甕	(16.0)	<8.5>	-	口縁~体部	径3mm以下の砂粒を含む	明黄褐	明黄褐	口縁から体部にかけてスス付着	190027
図11-20	5-1・2	SH303	甕	(16.0)	<11.3>	-	約1/4	径3mm以下の砂粒を少し含む	明赤橙	明赤橙	体部上位に棒状工具による沈線文	190028
図11-21	-	SH303	甕	-	<2.7>	3.4	底部のみ	径3mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	褐灰	焼成がややあまい	190029
図11-22	5-3	SH303	甕	(11.5)	12.3	-	約1/2	径3mm以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙 ~黒褐	橙	底部外面~内面の調整粗い	190030
図11-23	5-4	SH303	甕	(10.4)	<11.5>	-	約1/4	径6mm以下の砂粒を少し含む	赤橙	にぶい橙	体部に黒斑 口縁端部をわずかに欠く	190031
図11-24	5-5	SH303	甕	(13.2)	12.95	5.5	約2/3	径3mm以下の砂粒をやや多く含む	暗赤褐色	淡赤褐色	一括取上・外来系か	190032
図12-25	-	SH303	鉢	(12.6)	<6.1>	-	約1/3	緻密	浅黄橙	浅黄橙	器壁外面摩滅	190033
図12-26	5-6	SH303	鉢	(18.0)	<8.0>	-	約1/4	径2mm以下の砂粒を少し含む	淡黄橙	淡褐	底部付近に黒斑 器壁外面摩滅	190034
図12-27	5-7	SH303	鉢	(21.8)	13.5	-	口縁2/3欠く	径1mm以下の砂粒を少し含む	褐	にぶい赤橙	器壁外面にスス・コゲ付着	190035
図12-28	5-8	SH303	鉢	9.6	9.0	4.6	ほぼ完形	径2mm以下の砂粒を少し含む	褐	褐	外面摩滅する	190036
図12-29	5-9	SH303	甕	-	<5.7>	2.3	底部~体部	径2mm以下の砂粒を含む	浅黄橙	にぶい黄橙	一括取上・底部焼成前穿孔 底部外面は被熱する。	190037
図12-30	5-10	SH303	台付鉢	-	<3.6>	8.0	口縁部欠く	径2mm以下の砂粒をわずかに含む	浅黄橙	浅黄橙	環部内面は丹塗り 脚部内面は器壁剥離	190038
図12-31	5-11	SH303	高坏	15.9	11.5	11.9	ほぼ完形	径1mm以下の砂粒を多く含む	黄褐	黄褐	特徴的な器形 台付鉢の可能性あり	190039
図12-32	5-12	SH303	器台	15.1	<15.8>	-	口縁~体部のみ	径5mm以下の砂粒をやや多く含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	調整粗い	190040
図12-33	5-13	SH303	ミニチュア土器	7.1	4.9	3.05	口縁一部欠く	径1mm以下の砂粒を含む	橙	橙	器壁外面はナデにより ケズリ単位不明瞭	190041
図14-1	5-14	SH301・303	壺	(19.3)	<7.3>	-	約1/4	径3mm以下の砂粒をわずかに含む	濃赤橙	濃赤橙	精製された胎土(外来系か) 内外面に黒斑	190042
図14-2	-	SH301・303	壺	-	<2.2>	-	約1/6	径1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	灰褐	灰褐	天地不明。 底面は剥離跡の可能性あり	190043
図14-3	5-15	SH301・303	壺	(22.0)	<2.6>	-	約1/16	径2mm以下の砂粒を少し含む	暗褐	暗褐	二重口縁壺 竹管文3点	190044
図14-4	-	SH301・303	壺	(16.6)	<3.6>	-	約1/8	径2mm以下の砂粒をわずかに含む	赤橙	明赤橙	器壁は丁寧なナデ消し	190045
図14-5	6-1	SH301・303	壺	-	<5.4>	-	約1/5	径6mm以下の砂粒を含む	赤橙	赤橙	4に似るが胎土が異なる	190046
図14-6	-	SH301・303	壺	(14.2)	<6.7>	-	約1/6	径1mm以下の砂粒を少し含む	にぶい黄橙	にぶい橙	口縁端部は粗雑なつくり	190047

法量の単位はcm () は復元値 < > は残存値

挿図番号	図版番号	遺構	器種	法量			残存状況	胎土	色調		備考	登録番号
				口径	器高	底径			外面	内面		
図 14-7	—	SH301・303	壺	(19.2)	<5.6>	—	約 1/12	径 3mm 以下の砂粒を少し含む	橙	橙	器壁外面摩滅	190048
図 14-8	6-2	SH301・303	壺	(19.4)	<14.1>	—	約 1/3	径 3mm 以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙 ～黒褐	浅黄橙	器壁外面にスス附着	190049
図 14-9	6-3	SH301・303	壺	(30.9)	<11.65>	—	約 1/8	径 10mm 以下の砂粒を含む	暗黄褐	にぶい黄橙	口縁に歪みあり。径は残存部から推定 口縁部は上方に伸びる特徴	190050
図 14-10	—	SH301・303	壺	(18.0)	<5.4>	—	約 1/16	径 2mm 以下の砂粒を含む	橙	橙	やや摩滅する	190051
図 14-11	—	SH301・303	壺	(17.6)	<3.9>	—	約 1/16	径 1mm 以下の砂粒をわずかに含む	褐	褐	器壁外面に剥離	190052
図 14-12	6-4	SH301・303	壺	(9.4)	<10.9>	—	約 1/3	径 2mm 以下の砂粒を多く含む	浅黄橙	浅黄橙～ にぶい黄橙	やや丁寧な調整を施す	190053
図 14-13	—	SH301・303	壺	(13.6)	<7.0>	—	約 1/8	緻密	浅黄橙	浅黄橙	全体的に摩滅する	190054
図 14-14	—	SH301・303	壺か	(11.0)	<4.3>	—	約 1/4	径 2mm 以下の砂粒を含む	黄灰	黒灰	脚部の可能性あり 口縁端部に指オサエ時の粘土が吸る	190055
図 14-15	—	SH301・303	壺	—	<5.3>	—	約 1/8	径 3mm 以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	器壁薄い	190056
図 14-16	—	SH301・303	壺か	—	<9.8>	—	約 1/6	径 5mm 以下の砂粒を少し含む	明褐	明褐	器壁内外面ともに ハケ良好に残る	190057
図 14-17	—	SH301・303	壺か	—	<4.3>	(8.6)	底部のみ	径 3mm 以下の砂粒を多く含む	にぶい褐～ にぶい橙	にぶい褐	器壁極めて厚い	190058
図 14-18	—	SH301・303	壺	—	<3.0>	(4.0)	約 1/3	径 5mm 以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙	浅黄橙	小型品か	190059
図 14-19	—	SH301・303	壺か	—	<2.4>	(2.9)	底部のみ	径 1mm 以下の砂粒を含む	灰白	にぶい黄橙	摩滅著しい	190060
図 14-20	6-5	SH301・303	壺か	—	<3.8>	—	底部のみ	径 3mm 以下の砂粒を含む	灰白	黒	器壁外面にスス附着	190061
図 14-21	—	SH301・303	壺か	—	<4.2>	—	底部のみ	径 2mm 以下の砂粒をわずかに含む	暗黄褐	にぶい黄橙	内外面ともに摩滅	190062
図 14-22	—	SH301・303	壺か	—	<2.4>	—	底部のみ	径 3mm 以下の砂粒を含む	橙	浅黄橙～橙	ほぼ丸底	190063
図 14-23	—	SH301・303	壺か	—	<1.6>	—	底部のみ	径 4mm 以下の砂粒を少し含む	にぶい橙	にぶい橙	外面摩滅	190064
図 14-24	—	SH301・303	壺	—	<5.0>	—	底部のみ	径 1mm 以下の砂粒を含む	浅黄橙	浅黄橙	内外面ともに摩滅	190065
図 14-25	—	SH301・303	壺	—	<2.75>	—	約 1/6	径 0.5mm 以下の砂粒をわずかに含む	暗灰褐	にぶい橙	器壁薄い 外系系か	190066
図 15-26	6-6	SH301・303	甕	(28.0)	<11.0>	—	約 1/8	径 5mm 以下の砂粒を含む	明黄褐	明黄褐	口縁端部に平坦面をつくる	190067
図 15-27	6-7	SH301・303	甕	(26.6)	<7.1>	—	約 1/6	径 4mm 以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙 ～褐灰	にぶい黄橙	口縁外面にスス附着	190068
図 15-28	—	SH301・303	甕	(27.2)	<5.0>	—	約 1/6	径 2mm 以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	外面やや摩滅	190069
図 15-29	—	SH301・303	甕	(26.6)	<3.9>	—	約 1/12	径 4mm 以下の砂粒をわずかに含む	にぶい橙	にぶい橙	全体的に摩滅	190070
図 15-30	—	SH301・303	甕	(16.0)	<5.6>	—	約 1/12	径 2mm 以下の砂粒を含む	にぶい黄褐	にぶい黄橙	内面黒斑	190071
図 15-31	—	SH301・303	甕か	—	<5.4>	—	約 1/16	径 5mm 以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	明黄褐	器壁厚い	190072
図 15-32	—	SH301・303	甕か	—	<3.6>	—	約 1/12	径 2mm 以下の砂粒を含む	橙	橙	全体的に摩滅する	190073
図 15-33	—	SH301・303	甕	(23.5)	<2.6>	—	約 1/8	径 1mm 以下の砂粒をやや多く含む	暗黄白	暗黄白	同一個体があるが接合しない	190074
図 15-34	—	SH301・303	甕	(22.6)	<4.45>	—	約 1/8	径 1mm 以下の砂粒をわずかに含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	摩滅。流れ込みか	190075
図 15-35	—	SH301・303	甕	(18.3)	<4.8>	—	約 1/8	径 2mm 以下の砂粒を含む	黄橙	黄橙	摩滅著しい	190076
図 15-36	—	SH301・303	甕	(15.4)	<6.8>	—	約 1/8	緻密	にぶい橙	にぶい橙	摩滅著しい	190077
図 15-37	—	SH301・303	甕	(14.3)	<2.8>	—	約 1/8	径 3mm 以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	口縁部外面にハケ目痕跡残る	190078
図 15-38	—	SH301・303	甕	(14.0)	<4.4>	—	約 1/12	緻密	にぶい橙	にぶい橙	全体的に摩滅	190079
図 15-39	—	SH301・303	甕か	(16.4)	<3.8>	—	約 1/12	径 2mm 以下の砂粒を多く含む	暗褐	暗褐	摩滅著しい	190080
図 15-40	—	SH301・303	甕か	(16.0)	<2.3>	—	約 1/8	径 5mm 以下の砂粒を少し含む	褐	褐	全体的にやや摩滅	190081
図 15-41	—	SH301・303	甕か	—	<5.6>	(6.0)	約 1/8	径 2mm 以下の砂粒を含む	浅黄橙	黒	全体的に摩滅する	190082
図 15-42	—	SH301・303	甕	—	<3.1>	6.4	約 1/2	径 4mm 以下の砂粒を含む	黒褐～ にぶい黄橙	浅黄橙	器壁外面に黒斑が広がる	190083
図 15-43	6-8	SH301・303	甕か	—	<2.3>	—	底部のみ	径 7mm 以下の砂粒を少し含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	全体摩滅 調整単位不明瞭	190084
図 15-44	6-9	SH301・303	甕	—	<2.6>	—	底部のみ	径 3mm 以下の砂粒を少し含む	灰	にぶい橙	完全な丸底	190085
図 15-45	—	SH301・303	甕か	—	<11.4>	—	約 1/4	径 2mm 以下の砂粒を少し含む	赤橙	赤橙	復元胴部最大径 19.7cm 内面は極めて丁寧なナデ消し	190086
図 16-46	6-10	SH301・303	鉢	11.7	4.5	4.3	口縁一部欠く	径 2mm 以下の砂粒を少し含む	浅黄橙 淡赤橙	橙 にぶい橙	内外面ともにやや摩滅	190087
図 16-47	—	SH301・303	鉢	—	<2.3>	4.8	底部のみ	径 3mm 以下の砂粒を含む	浅黄橙	浅黄橙	全体的に摩滅	190088
図 16-48	—	SH301・303	鉢	—	<2.3>	4.1	底部のみ	径 2mm 以下の砂粒をわずかに含む	灰黄褐	にぶい黄橙	全体的に摩滅	190089
図 16-49	—	SH301・303	鉢	—	3.6	<2.9>	約 1/5	微砂粒	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	口縁部がわずかに残る 全体的に摩滅	190090
図 16-50	6-11	SH301・303	鉢	(11.1)	5.7	3.6	約 1/10	径 0.5mm 以下の砂粒を少し含む	橙	黄橙	器壁外面摩滅	190091
図 16-51	6-12	SH301・303	鉢	—	<4.9>	4.1	体～口縁部欠く	径 2mm 以下の砂粒を含む	黄白	淡黄橙 濃赤橙	摩滅著しい 内外面丹塗り	190092
図 16-52	6-13	SH301・303	鉢	—	<3.7>	3.6	底部のみ	緻密	浅黄橙	橙	器壁外面に黒斑	190093
図 16-53	—	SH301・303	鉢	—	<2.8>	4.2	底部のみ	径 7mm 以下の砂粒を少し含む	にぶい橙	灰黄褐	外面底部に黒斑	190094
図 16-54	6-14	SH301・303	鉢	—	<3.2>	4.9	底部のみ	緻密	浅黄橙	黒	しっかりとした平底をもつ	190095

質量の単位はcm () は復元値 () は残存値

挿図番号	図版番号	遺構	器種	質量			残存状況	胎土	色調		備考	登録番号
				口径	器高	底径			外面	内面		
図16-55	6-15	SH301・303	鉢	—	<3.3>	3.8	底部のみ	径3mm以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙	褐灰	底部外面に角柱状の工具を刺した跡	190096
図16-56	7-1	SH301・303	鉢	—	<4.6>	—	底部～体部	径5mm以下の砂粒をやや多く含む	明黄褐	淡赤橙	外面は著しく摩滅する 底部は一部を除き欠損 残存部から平底気味か	190097
図16-57	—	SH301・303	鉢か	(10.7)	<4.2>	—	約1/8	径3mm以下の砂粒をわずかに含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	内外面ともにやや摩滅	190098
図16-58	7-2	SH301・303	鉢	(10.2)	<3.6>	—	口縁一部欠く	径5mm以下の砂粒を含む	浅黄橙	浅黄橙	全体的に摩滅	190099
図16-59	—	SH301・303	鉢	(11.0)	<3.1>	—	約1/3	径1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精製された胎土	190100
図16-60	—	SH301・303	鉢	(13.0)	<3.5>	—	約1/3	緻密	浅黄橙	浅黄橙	全体的に摩滅	190101
図16-61	7-3	SH301・303	鉢	—	<5.2>	—	底部のみ	径2mm以下の砂粒を多く含む	明黄褐 ～黒褐	浅黄	摩滅著しい	190102
図16-62	7-4	SH301・303	鉢	12.9	6.4	3.7	口縁一部欠く	径6mm以下の砂粒を少し含む	浅黄橙	浅黄橙	外面約半分に黒斑 外面摩滅	190103
図16-63	—	SH301・303	鉢	(9.8)	<7.0>	(4.6)	約1/6	径0.5mm以下の砂粒を少し含む	黄褐	黄褐	51と似る	190104
図16-64	—	SH301・303	鉢	—	<6.5>	(4.0)	約1/8	緻密	灰褐	灰褐	内外面ともにやや摩滅	190105
図16-65	7-5	SH301・303	鉢	(30.6)	<9.5>	—	約1/3	径2mm以下の砂粒をわずかに含む	黄白	にぶい橙	口縁部外面はハケ目か カキ目状となる	190106
図16-66	7-6	SH301・303	鉢	(19.6)	<7.3>	—	口縁部～体部	径2mm以下の砂粒を多く含む	浅黄橙	にぶい黄橙	摩滅著しい	190107
図16-67	—	SH301・303	鉢	—	<8.5>	—	約1/8	径3mm以下の砂粒を含む	黄橙	浅黄橙	摩滅著しい	190108
図16-68	—	SH301・303	鉢	(22.0)	<5.3>	—	約1/6	径0.5mm以下の砂粒を少し含む	浅黄橙	浅黄橙	丁寧な調整を施す	190109
図16-69	7-7	SH301・303	鉢	(11.7)	2.7	(5.6)	約2/3	径1mm以下の砂粒をわずかに含む	暗褐	暗褐	丁寧な調整を施す	190110
図16-70	7-8	SH301・303	甌	—	<10.6>	—	底部のみ	緻密	にぶい黄橙	にぶい黄橙	摩滅著しい	190111
図16-71	7-9	SH301・303	甌	—	<4.9>	—	底部のみ	径5mm以下の砂粒を多く含む	暗黄褐	黄褐	内外面ともに摩滅	190112
図16-72	7-10	SH301・303	台付鉢	—	<4.5>	(7.4)	脚台部のみ	径0.5mm以下の砂粒を多く含む	褐	褐	丁寧な調整を施す 他と色調が異なる	190113
図16-73	7-11	SH301・303	台付鉢	—	<4.1>	(4.9)	約1/2	径3mm以下の砂粒をわずかに含む	橙～にぶい黄橙	にぶい黄橙	摩滅により調整不明瞭	190114
図16-74	7-12	SH301・303	台付鉢	—	<4.0>	—	脚台部のみ	径2mm以下の砂粒を少し含む	淡赤橙 ～浅黄橙	淡赤橙 ～浅黄橙	摩滅著しい	190115
図16-75	—	SH301・303	鉢か	—	<3.3>	—	小片	径2mm以下の砂粒を含む	浅黄橙	浅黄橙	口縁端部を外側につまむ	190116
図17-76	7-13	SH301・303	高坏	(24.2)	<8.4>	—	脚・口縁部欠く	径2mm以下の砂粒をわずかに含む	浅黄橙	浅黄橙	内外面摩滅により調整不明瞭 図は合成復元したもの	190117
図17-77	7-14	SH301・303	高坏	—	<4.85>	8.2	坏部欠く	径3mm以下の砂粒をやや多く含む	濃赤橙	濃赤橙	脚部に5か所の穿孔 穿孔はハケ目調整後にあける	190118
図17-78	7-15	SH301・303	高坏	—	<4.7>	(9.5)	約1/6	径1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや精製された胎土	190119
図17-79	8-1	SH301・303	高坏	—	<6.1>	(10.6)	脚部のみ	径0.5mm以下の砂粒を多く含む	暗褐	暗褐	脚部に穿孔あり	190120
図17-80	—	SH301・303	高坏	—	<4.5>	—	脚～坏部	径0.2mm以下の砂粒を多く含む	浅黄橙	黒褐	脚部はケズリか	190121
図17-81	8-2	SH301・303	高坏	—	<4.3>	—	口縁・脚端部欠く	径2mm以下の砂粒を少し含む	黄灰	褐	図上復元したもの	190122
図17-82	8-3	SH301・303	高坏	—	<3.95>	(8.8)	約1/6	径3mm以下の砂粒をわずかに含む	黄白	黄白	摩滅のため調整不明瞭	190123
図17-83	—	SH301・303	高坏	—	<4.3>	—	脚部小片	径0.5mm以下の砂粒を少し含む	褐	褐	穿孔2か所	190124
図17-84	8-4	SH301・303	高坏	—	<4.7>	—	脚台部のみ	径5mm以下の砂粒を含む	褐	褐	脚部に穿孔2か所あり	190125
図17-85	8-5	SH301・303	高坏	—	<4.9>	—	坏部	径0.3mm以下の砂粒を含む	褐	褐	ミカキから坏部と考えるが、脚部の可能性あり	190126
図17-86	—	SH301・303	高坏	—	<4.7>	—	脚台部のみ	径4mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	褐灰～ にぶい黄橙	外面摩滅	190127
図17-87	8-6	SH301・303	高坏	—	<4.5>	—	脚～坏部	径2mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙 ～褐灰	にぶい黄橙	脚部の器壁薄い	190128
図17-88	8-7	SH301・303	高坏	—	<8.8>	(11.4)	脚部	径0.5mm以下の砂粒を含む	浅黄橙	浅黄橙	脚部に穿孔あり 脚部はケズリか	190129
図17-89	8-8	SH301・303	高坏	—	<5.7>	—	坏～脚部	径1mm以下の砂粒を含む	浅黄橙	浅黄橙	全体的に摩滅 脚部に穿孔あり	190130
図17-90	8-9	SH301・303	高坏	—	<6.6>	(17.2)	約1/4	径1mm以下の砂粒をわずかに含む	橙	橙	脚部に3か所の穿孔 内外面摩滅	190131
図17-91	8-10	SH301・303	器台	(9.6)	<10.2>	—	約1/4	径5mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	灰黄褐 ～褐灰	やや丁寧な調整を施す	190132
図17-92	8-11	SH301・303	器台	—	<6.4>	—	脚・受部欠く	径2mm以下の砂粒を少し含む	黄橙	黄橙	脚部に5か所の穿孔 内外面ともに摩滅	190133
図17-93	8-12	SH301・303	器台か	8.3	5.4	(7.3)	脚端部欠く	径1mm以下の砂粒を少し含む	浅黄橙	浅黄橙	脚部に4か所の穿孔あり 配置間隔から計6か所か	190134
図17-94	8-13	SH301・303	ミニチュア土器	—	<4.5>	5.1	坏部欠く	径2mm以下の砂粒をわずかに含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	高坏形坏部と脚部の接合がやや甘い	190135
図17-95	8-13	SH301・303	ミニチュア土器	—	<3.35>	4.05	脚部～坏部	径1mm以下の砂粒をわずかに含む	淡黄白	淡黄白	丁寧な調整が施される 小型器台の可能性あり	190136
図17-96	8-13	SH301・303	ミニチュア土器	—	<4.65>	—	約1/3	径0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	にぶい橙	灰	鉢形 精製された胎土	190137
図17-97	8-13	SH301・303	ミニチュア土器	—	<1.8>	(2.9)	底部のみ	径1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	にぶい黄褐	环形	190138

鉄器

質量の単位はcm

挿図番号	図版番号	遺構	器種	残存長	最大幅	最大厚	種別	備考	登録番号
図6-1	8-14	SH301・303	鉄斧	6.6	4.1	2.3	鉄器	刃部幅3.7 袋状鉄斧	190139
図6-2	8-15	SH301・303	鉄鎌	8.3	3.1	0.75	鉄器	茎部は折れ曲がる	190140

圖 版



1. 古賀遺跡 3 区全景 (東上空から)



2. 古賀遺跡 3 区全景 (上空から)

図版 2



1. SH301・303 全景（上空から）



2. SH301・303 遺物出土状況（南から）



3. SH301・303 土層（北東から）



4. SH301・303 土層（南西から）



5. SH301・303 土層（南から）



6. SH303 SK1 遺物出土状況



1. SH302 全景 (上空から)



2. SH302 完掘状況 (北から)



3. SH302 土層 (西から)



4. SH302 土層 (東から)



5. SH302 土層 (南から)



6. SH302 土層 (北から)

图版 4





图版 6





图版 8



報告書抄録

ふりがな	こがいせき
書名	古賀遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書
シリーズ番号	第94集
編著者名	藤岡怜史・龍 孝明
編集機関	鳥栖市教育委員会
所在地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118番地 Tel 0942 (85) 3695
発行年月日	西暦2020年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
こがいせき 古賀遺跡 (3区)	さがけんとすし 佐賀県鳥栖市 こがまち、しゆくまち 古賀町、宿町	410213	—	33° 22' 55"	130° 30' 11"	20190524 ～ 20190705	500 m ²	宅地 造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古賀遺跡 (3区)	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡 溝 土坑	弥生土器 土師器 須恵器 鉄器	住居廃絶後に、多量の土器と自然石が投棄されている。

要約	<p>本遺跡は、低位段丘・扇状地上に立地する集落遺跡である。検出された主な遺構は竪穴住居跡3軒で、2軒は弥生時代終末期、1軒は古墳時代前期初頭に比定される。</p> <p>1・2区では、弥生時代前期末の集落が確認されているが、短期間ではあるものの、当該期の集落が展開していたことが明らかとなった。周辺では、内精遺跡や蔵上遺跡で同時期の集落が営まれている。本遺跡との間は谷もしくは河川によって集落は分断されているが、集落間の関係は不明である。集落が継続して営まれたものであるのか、北側に立地する元古賀遺跡のように断続的に営まれたものであるのか、今後の調査に期待される。</p>
----	---

古賀遺跡

鳥栖市文化財調査報告書第 94 集
2020 年（令和 2 年）3 月 27 日

発行 鳥栖市教育委員会
鳥栖市宿町 1118 番地
印刷 有限会社 久光印刷
鳥栖市田代昌町 477-6